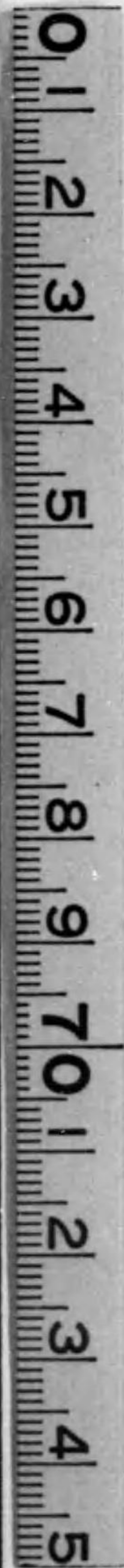


289

289-Mu 59ㄣ



1200500732165



始



42459

289  
11059



山口縣教育會編纂

村  
田  
清  
風





村田清風肖像

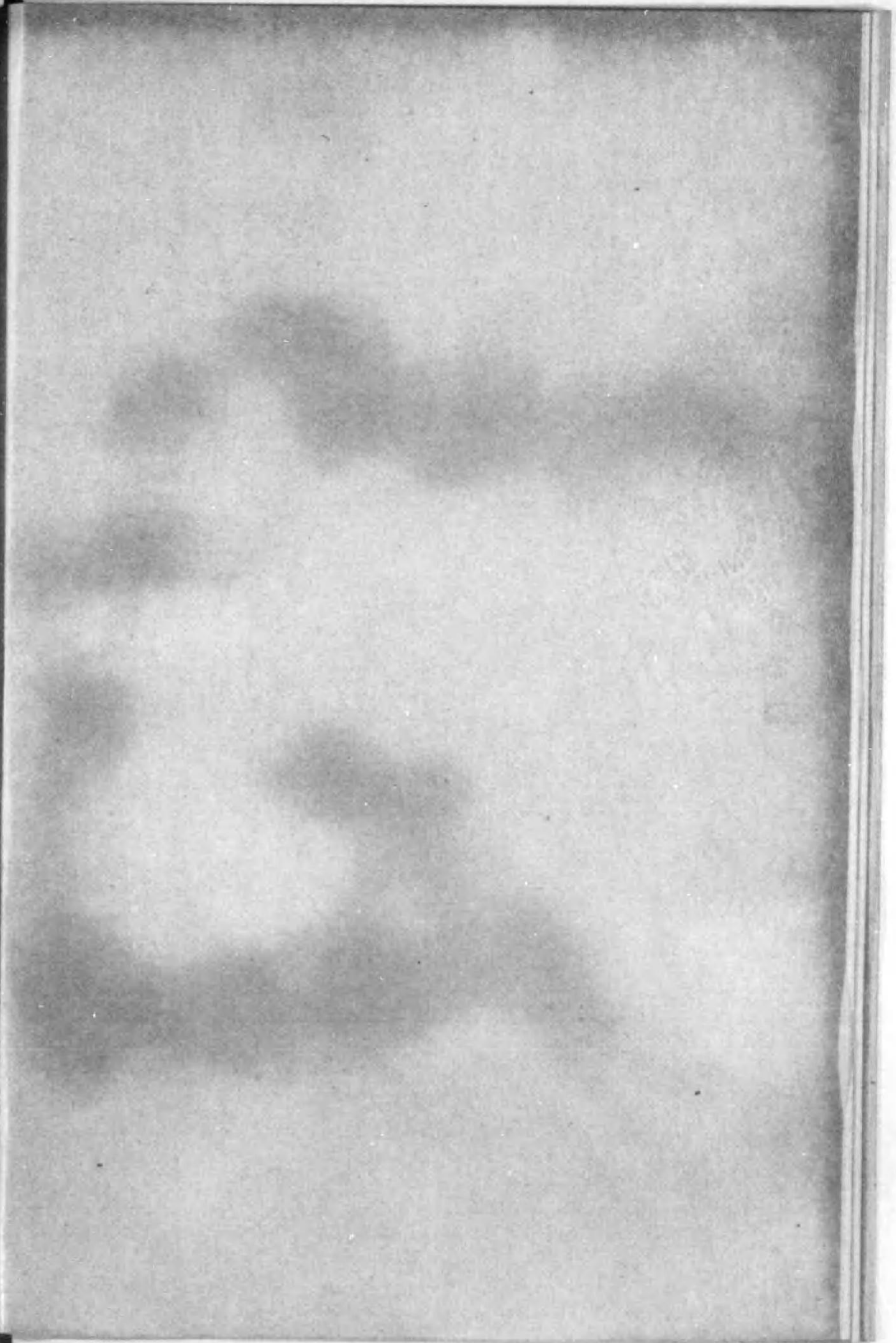
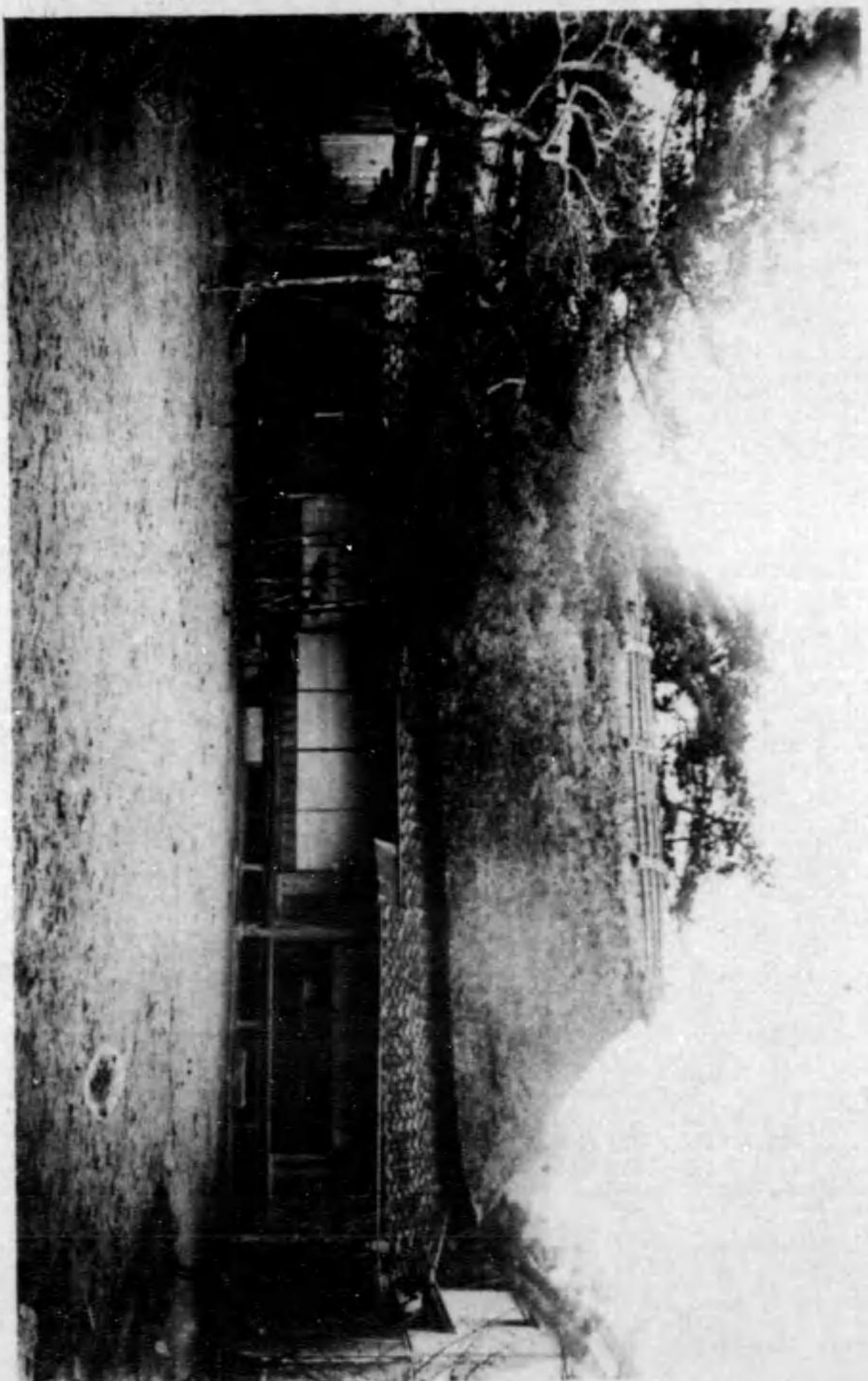
村田清風吟詠及筆蹟

西州乃風防  
日之如能  
暮打  
家  
人  
清風

滞  
鶴  
鳴

晴

三隅山莊



639-57

序

防長二州に人材雲の如く起つて、よく維新回天の大業を翼賛し奉り、明治聖代諸般の政務に當り、國光の發揚に力めたことは、實に近世史上の一大光彩である。

而してこの一大光彩を發揮する爲め、防長の偉人傑士が、十分にその活動をなし得たのは、實に村田清風の如き大先輩があつて、百難を排し、防長二州の財政を整理し、教育・産業・兵備・等、百般の施設その宜しきを得、原動力を充實して置いたことによるといはねばならぬ。

○

村田清風は實に、吉田松陰以前に於ける二州勤王の木鐸にして、維新發祥の先驅者である。明治維新前後の防長の人材であつて、直接間接に、彼の提擲を受けぬものはないといつても、敢て過言ではない。

彼は又良吏として、文化より安政に至る内外多事の秋に當り、藩主毛利齊房、齊瀨、齊元、齊廣、敬親の五公に歴事し、五十餘年一日の如く政局の樞機に參與し、富國に強兵に、よく二州の自力更生を圖つた恩人である。

○

今年はこの人傑、村田清風生誕の年から、百五十年目に當る。そして今や我が國は、再び往年に似て内外多事に、多忙なる昭和維新の使命に直面

してゐる。國民としては、最も緊張を要するの秋であり、殊に耀かしき傳統に生きる、我が防長青少年にとつては、皇國の爲め若き血潮の高鳴りを禁じ得ぬ時である。

本會が茲に青少年讀物として、この維新史上、隠れたる草分けの恩人、村田清風の小傳を刊行することにしたのは、大いに意の存するところがある。幸にしてこの小冊子が聊かでも、清風精神の存するところと、一代の面目を傳へ、青少年修養の上に、何等かの裨益を與へることが出來たならば、望外の喜びである。

○

なほ本書の編纂に當り、早くより多大の力を盡された、塚本小治郎氏、森山右一氏の勞と、周密なる校閲及び題簽を賜はつた、清風の令孫、村田峰次郎先生、並に口繪寫眞の和歌を寄せられた瀧口吉良翁の厚意に對しては、本書の爲め、特記して茲に深甚の謝意を表したい。

昭和七年五月中浣。

山口縣教育會議す。

### 凡例

- 一、本書の記事は、大凡年月の順によることゝしたが、編纂題目の都合により、多少前後し、重複したところもある。
- 一、記事の程度は青少年讀物として、稍々通俗的に、またその體裁はなるべく印象的に心掛け、紙數の都合と相俟つて、思ひきり、精叙略叙の手心を下した。
- 一、舊藩主及び村田清風翁、其他諸先輩、知名の士の事を書くに敬語、敬稱を省略してある場合が多い。時に行文の都合によつて、「彼」と代名詞を用ゐたところもある。
- 一、詩は青少年諸君の朗誦、朗吟に便ならしめるため、直譯して書流した。



一、本書をものするに當り、參考に供した書は多いが、左にその主なるものを舉げて、謝意を表したい。

△清風松碑陰文（木戸孝允先生撰文）

△村田清風先生碑文（山縣有朋公撰文）

△故長藩參政正四位村田君碑文（山田顯義伯撰文）

△忠正公勤王事蹟（中原邦平著）

△もりのしげり（時山彌八著）

△相州鎌倉御墓御位牌修造將之奉行私記（齋藤彦一氏藏）

△清風年譜稿（栗栖守衛氏著）

△羽賀臺御狩の記（冷泉古風著）

△大津郡勢概要（福江治郎作氏藏）

△清風詩集、海防糸口、漁翁寢言、病翁字波言、漁翁若話、清風存意、遼東のいのこ（以上清風自筆稿本又は寫山口圖書館藏）

△海國兵談（林子平著）

一、「清風を繞る人々」中、挿入の略系譜は、村田看雨先生の御教示によるものである。

以上明記して謝意を表すると共に、豫めお断りして置く。

目次

一、家系と幼時……………一

大津郡三隅村に生る

八谷彌六郎に學ぶ

母の庭訓

太宰府天滿宮に祈る

二、青年時代……………八

明倫館に入る

二州の各地に遊ぶ

江戸の學問

西北の風防ぎして

水軍三嶋流の兵法  
神器陣を作る

三、海防論……………一〇

海寇防禦の策

「唱義報恩無盡講」

林子平を崇拜す

四、墓地の探索……………一七

廣元、季光の墳墓

昔語りきくきくむしる

復古思想の芽ぶき

五、六本松と清風松……………三五

記念の松

文臺「鶴ヶ岡」

清風松と孝允

六、藩政改革と進退(上)……………四二

長藩財政紊る

改革の建議

俗吏に恨まる

七、藩政改革と進退(下)……………五〇

毛利敬親立つ

「八萬貫の大敵」

天保の大儉政

八、羽賀臺の関武(上)……………三

海防の急務

関武の進言

訓練の準備

九、羽賀臺の関武(下)……………七〇

隊伍肅々

臺上の関武

「長州さん頼みますぜ！」

一〇、政客往來……………三

横井小楠來る

海防僧月性來る

秋良敦之助來る  
滞穂ある田は静かなり

一一、尊 聖……………一〇一

三隅山莊に歸臥す

赤川淡水のこと

四聯

經世済民の活學問

學は大旨をつかめ

四峠の論

藏書印

一二、晩 年……………一七

明倫館重建のこと  
五斗味噌汁  
殿中に杖を許さる  
七十三歳にて歿す

一三、遺 芳……………一九

漢 詩

清風の詩風

和 歌

俳 句

一四、清風を繞る人々……………一五四  
母と夫人

略 系 譜

大津唯雪

竹内勝愛

周布政之助

一五、餘 榮……………一七五

贈正四位

松陰以前の開拓者

清風政策の片鱗

「西海の底に聲あり」

(附) 略 年 譜……………一八四

# 村田清風



## 一、家系と幼時

初々しい朝の光の中に

かすかにゆれる草木の戦ぎよ。

青海島の彼方に白鷗かけり

日本海の濤が時々キラリと光る。

山口縣教育會編

## 家系と幼時

かうして物みなが「生」の歡喜に満ち溢れた天明三年四月二十六日、長門國、大津郡、三隅村、澤江の邸に呱呱の聲があがった。村田清風の誕生である。

あゝ、この聲こそは、やがて防長二州に精神作興を呼びかけ、明治維新回天の大業に魁けて、富國強兵の礎石を築くに至る最初の聲であつたのである。

彼は幼名を龜之助といつた。長じて新左衛門また四郎左衛門と改め、終りには織部と稱した。又諱は順之、將之、後ち清風と改めたのであつた。雅號は東陽、梅堂、松齋、嘯雨、靜翁その他である。

父は四郎右衛門光賢といひ、明和、安永、天明、寛政の頃、毛利治親(容徳公)に事へて、祿五十石を食み、御開作一件、並に諸郡代官役を勤めて、農政、民治に盡した人である。母は兼常氏でその名を岩といひ、有名な賢婦であつた。勤勉努力、頗る内助の功

多く、遂に疲勞過度のため、晩年はその兩眼を失ふに至つたほどであるが、清風をして大成せしめたのは、實にこの母の庭訓によるものが多いと言はれてゐる。

又祖父は四郎左衛門爲之、寶曆年中、藩主重就(英雲公)に仕へ撫育局創設の際、諸僚と共に藩の財政方面に勤めた人である。かうした家に生れた清風である。父母が彼に文武の道を修めしむべく、日夜心膽を碎いてゐたことは、並々ならぬものがあつた。しかし清風の幼時は、その學習に於ては、あまり記憶力が強いといふ方ではなかつた。彼は寛政元年七歳にして、八谷彌六郎に就いて、手習、漢籍を學んでゐたが、大學一冊を習得し終るに、殆ど三ヶ年を費したとさへ傳へられてゐる。

ある日學友の都野某は、清風の學習の遅々として進まないのを嘲笑したことがあつた。これを聞いた母は深く嘆き、清風を膝近く呼んで、

「龜之助、お前のやうに、いつまでも學問の出来ぬことでは、村田の家は嗣がれますまいぞ。何一つ不足なく、他様と同じやうに具へてゐる體を持ちながら、何故に他様の出来る學問がお前にはむづかしいのであらう。よく考へてみるがよい。何かお前に足らぬ心があるのであるまいか。」と涙ながらに、優しく勵ましたのであつた。

「はい。」

彼は只うつむいてかう答へたのみであつた。一穗の青燈が

靜かに瞬いて暫くの間沈黙が続いた。一時は頭上に、ゴーンと下された鐵錘か何ぞのやうな重さを感じた彼であつたが、間もなく眉宇に決心の色を浮べて、

「お母様、御心配をかけて眞に相済みませんでした。やりま

す。やりま

す。龜之助はこれからきつと心を入れかへま

す。そして村田の家を立派についでみせます。」

とキツパリ言ひ放つた。

「何、誰にも負けはしないぞ！」

かう思ひつめた彼は、それから間もなく、はるけき太宰府の天満宮に、祈願のため旅立つことになつた。長亭短驛、幾日かの宿りを筑紫路に重ねて、遂に彼の地に到着したが、前夜は旅宿



の一室に齋戒し、夜の明けるのを待つやうにして、社殿へと急いだ。そして拍手の音もいと爽かに、母もろとも、

「學問成就！」

と一心に禱を捧げた。そして神前を退るに當つては、かたく三ヶ年の間、梅の實を食べないことを誓つたほどであつた。それからの彼は緊張した心で、再び關門の海を越えたが、旭をうけた、一つ一つの波のうねりにさへも、「不斷の努力」を読みとることが出来た。

「ナニ、凡てはこれからだ。」

清風は心の中で、かう叫ぶ希望の聲を幾度かきいた。

これからの清風は、その潜在休眠してゐた偉器を伸展する

ことになり、日夜の勉勵につれて、其の學は精しく進み、寛政五年十一歳の頃には、既にむづかしい四書五經の素讀を済ませてゐたので、聞く者は皆驚いてしまつた。

然るにさきに清風を嘲笑した都野はどうであらう。その頃まだ孟子を讀んでゐたので、清風は之を笑ひかへしたといふ逸話もある。

それからのこと、越えて寛政九年、彼が十五歳の春には、藩學明倫館に入ることになり、文武兩道の兼修に一段の拍車をかけることゝはなつた。

二、青年時代

清風の藩學明倫館めいりんくわんに於ける修養は、實に永いものであつた。即ち寛政九年、十五歳にして入學以來、二十歳の時を一寸除いては、二十六歳の退館時まで、都合十年間、こゝにあつて修養努力を續けたのであつた。

特に其の頃感心な話は、その明倫館に寄宿する前、澤江の自宅から、明倫館まで毎日徒歩で通學してゐたことである。當時明倫館は萩の堀内にあつたので、澤江からは何でも、片道五里、往復十里はあつたであらう。

これに同情する人などあると、清風は常に答へて言つた。「父上は若い時、やはり藏元くわんげん役所まで日勤にちきんしてゐられた。

自分の通學は全く父上の眞似まねだ。少しも苦しいことはない。」

と。これは當時の武藝の中に「小鷹こたかの法」といふ早道の稽古けいこがあつたが、一方にはそれを心掛けてのことでもあつた。

藏元役所といふのもやはり、同じく萩の堀内にあつたもので澤江からは同じ道程みちほどであつた。これを今日の學童がくどうに比べたら、何といふ意志の強いことであらう。艱難かんなん汝を玉たまにす。

清風は少年にして、既に自ら求めてこの眞理を體驗してゐたのであつた。

かうした意氣であつたから、清風在館中の成績は、いふまでもなく年々等輩とうはいを凌しのいで行つた。そして試業しぎふの際幾回も甲

科に及第して、藩主より特に、褒賞を得たことも十數回に及んだといふ。

この頃になると清風はもう單に、學館に於て學ぶことのみを以て満足せず、一方暇を得る毎に、防長二州の山河を跋涉して、地理を視、史蹟を探り、到る處に名僧を訪ひ、碩儒の門を叩いて、智徳の研鑽に勉めた。

大津郡深川の大寧寺に素明和尚を尋ねて、道義を論問し、都濃郡徳山に、役藍泉を訪ねて詩文の應酬を試みたのも此の頃であつた。又山縣太華等と仙崎灣に舟を泛べて月明の夜を思ひきり、その志す所を語り合つたのも此の頃の事であつた。かうして彼の心氣は頓に伸びゆくのを覺えた。

特に日本海の濤と巖とは、彼にとつて極めて有意義な印象であつた。

「寄せては返す大濤に

洗はれて立つ巖にみよ。

千古のリズムー

若人よ、

人生とはこのやうなものだ。」

日本海は、かうして彼に一步一步の修養を教へ、世局の波瀾とそれを乗切る心術を默示してくれるかの氣がするのであつた。

「聞かんとすれば花は語りきかすなり。」彼がそれを日本海

の濤の音に聞き得たのは、實に尊いことであつたといはねばならぬ。

享和二年、清風甫めて二十歳の時、彼は見習のため、松浦忠左衛門に従つて江戸に赴くべく國元を出發した。そして途中岩國の錦帯橋を過ぎんとして、彼の司馬相如が蜀の昇仙橋の柱に「大丈夫、高車駟馬に乗らすんば汝の下を過ぎず」と題して去つた故事を想ひ出し、自分も志を得ざれば、再び此の橋を渡らないと誓つたといふ。

かくて東海道にさしかゝり、雲煙の間に高く聳ゆる富士山を初めて見た時、

來て見れば聞くより低し富士の峰

釋迦も孔子もかくやあるらむ。

と一首の和歌を詠んだ。もとより青年氣鋭の餘に發したものではあるが、其の風發卓厲の氣象は此の和歌の上にも表はれ、意氣すでに斗牛を衝くの慨がみえるではないか。

其の江戸に在るや、屢々松平定信(白河樂翁公)に謁した。樂翁は清風より數篇の詩文を需めて其の志す所を視、將來有爲の大人物であることを喜んだ。蓋し、樂翁と毛利家とは親姻の關係が有つたのでもあらうが、清風の偉材たることを聞いて、特に其の邸に招かれたものと想はれる。清風も亦大いに樂翁に私淑し、後年、防長二州の政治改革に當つては、樂翁に倣ふ所の多かつたことは、想像するに難くないものがある。

文化五年、清風は藩主毛利齊房の近習となり、扈從して再び江戸に赴いた。後文化十年、彼は塙保己一の和學講習所に入つて、制度典例を學び、柴田癸堂に就いて貯穀の法を學んだ。これ實に他日藩政に資し、實施する所あらんことを豫期しての學習であつた。

この頃魯西亞の船艦が頻りに我が邊海に出沒し、人心頗る恟々たるものがあつた。清風は彼の林子平の著「海國兵談」を閱讀して、早晚外患の我が國に到らむことを憂慮し、夙に海防の事に心を碎いてゐた。

然るに、世は泰平無事の久しきに狎れ、人は優柔華美を競ひ春は花よ櫻よと立ち騒ぎ、殊に江戸萬家の人は隅田、飛鳥、小金

井と花に狂じてゐた。清風は一日所用あつて向島に行き、醉歌亂舞するこの男女の實況を目撃して、感慨の餘りかたへの花見茶屋に立ち寄つて、

西北の風防ぎして幕うてよ、

我が日の本の櫻見る人。

と一首の和歌を短冊に書き認め、櫻の枝に結びつけて立ち去つた。

此の時同じ茶屋の縁に深編笠を被つた一人の武士が居た。清風が立ち去つた後、直ぐに其の短冊の和歌を讀んで居たが何を思ひついたか、清風の行く後を追うて、近よらず、遠ざからず尾いて行くのであつた。そして清風が櫻田の毛利邸に入

るのを見極めるや、颯然として立ち去つてしまつた。

この深編笠の人こそ誰あらう。彼の水戸藩の名臣、藤田東湖であつたのである。後年、長藩と水戸藩とが、尊王攘夷の事に氣息を通するやうになつたのも、一には清風と東湖との接近が其の因をなしてゐるといへよう。

齊房薨じて、齊熙封を襲ぐに至り、清風は密用方右筆となつた。密用方は當時藩府の顧問で典禮又は儀式、系圖、記録等を司る役であり、右筆は機密文書等に參與し、藩主に直屬して、江戸行相府に居つたものである。

間もなく、清風は海防の忽緒に附すべからざるを思つて議を上り、文化九年と、十二年の秋の兩度、水軍に習練せる森重曾

門をして、合武三島流戦法を萩の海上に演習せしめた。

さてこの三島流の海兵法といふのは、その昔瀬戸内海の因島、能島、來島の三島を根據とした村上海軍が、數百年の経験に基いてなしあげたもので、かの嚴島の義戦の時防長に従ひ來つて以來、二州には特殊關係のあつた兵法である。かの日露の役に東郷大將が、日本海で敵の先頭を壓したのも、日中の海戦に次ぐに夜襲を以てしたのも、皆これの應用だといはれてゐる位、有名なものである。

一體長州は、曾て源平の海戦、南北朝の海戦、嚴島の海戦、その他に於て十分海軍の實務演習に熟達して居たので、慶長、寛永の頃には、既に秩序正しい海軍を整備せること全國第一と稱

揚された位である。それを今清風は、時勢の着眼から、更に一段の飛躍的發展に導かうとしたのであるから、この企が當時の人々をして、齊しく目をみはらせたのも無理はなかつた。

それからこゝに面白いのは、清風が生れた大津郡の北海は捕鯨業の盛なところで、この疾風怒濤の蒼海上に行はれる様は、全く海戦演習の應用的修業として、これまでも藩府より、頻りと奨勵を加へて來たものであつたが、清風も亦大變それには同感で

「荒海を背景に鯨との戦は、この上もないよい海戦の稽古だ。」

といつて、益々これを勵ましてゐたものであつた。

又これまでの長藩の砲術家といふものは、舊法を墨守して、實戦に適しないものがあつたが、清風はこれをも憂へて、新に坂本孫八(天山と號す)の軍法を傳へ、また萩野準雄等を聘用して藩士に其の技を學ばせ、參政員を以て銃隊を編成せしめたりした。當時周發臺を設け、また「銃陣詳説」を教科書に充てたのも、すべて坂本の傳法を用ひたのであつた。

こゝに至つて、銃砲刀槍の各隊、各々其の用をなすことを得るやうになり、文化十三年これを「神器陣」と稱した。この名はやはり清風等が、神器譜からとつて名づけた有名なもので、この劃策が一藩内の士氣を鼓舞する上に、大いに力のあつたこととは言ふまでもない。

### 三、海防論

村田清風

かくの如く、清風は常に實行家としての面影の濃い人物であつたが、又一面卓拔なる理論家としても、次第に當時の防長に異彩を放つやうになつて來た。即ち次は彼に水軍訓練、其他の行動を起させた根柢思想―海防論そのものについて述べてみよう。

清風の海防論は、早く青年時代から彼の意識に上つてゐたものであるが、後年の著「漁翁寢言」の中に最もよくあらはれてゐるので、便宜その方から窺つて置きたいと思ふ。彼はまづその論を心から出發して論じてゐる。

「それ海寇防禦の策は、まづ死を決して心膽を練るにあり。」

論防海

説き、

と書き出してゐるのがそれである。そしてこれは、かの古の武内宿禰のやうに、水雲の際、みれどもみえない三韓へ、女后の御供をして押渡るほどの魂を云ふのだ。又其の後の世でいへば、北條時宗が、五千里四方を併呑した、かの蒙古の使を鎌倉に斬つた魂なのだと説いた。

清風が實に氣の人であり、實行の人であることが分るであらう。

一轉して防長に關しては、その三面が海で、たとへば狂ひ咲きのダリヤのやうな形をしてゐるところから、特に其の急を

「巴岐の御城所に、その昔北條時直、長州探題にて居住のこと、



又通浦六貫といふところに玉薬の藏ありしこと、元就公の意見で、防長七ヶ所の城配りも、大いに意味のあつたこと」などと教へ

「北浦御手當などいふことだけでは不足である。外船早頼の瀬戸を走り入るか、佐賀の關と、伊豫の國との間を走り入る時は大變で、およそ防長の邊海は、ことごとく御手當なくてはならぬ。」

と警告した。

そしてこれでなほ合點のゆかぬ人は、大津郡向津具の岬へ行き、こゝから遙かに日本海の西北でも見はるかして來い。さすれば分るであらうと激語してゐる。清風議論の調子、お

ほむねこの流儀が多く、まことに青年者流をして、痛快を思はしめるものがある。

次に日本全土に對しては、筆を改めて、

「又阿波と紀伊の間を外船通抜ける時は、五畿内、東海、山陽、悉く御手當あるべく、琉球、小笠原、八丈島などへ據り、根據とするやうのこともあらば、九州、四國、南海より房總陸奥に至るまで嚴重な警備が大切である。——つまりは、林子平のいふ日本といふ一大堅城を築くといふに落着するであらう。」と説き進めた。そして寇を防ぐのは須らくその寄來る寇の立場に於て、其の心を心として手配りをしなくてはならぬ、と結んでゐるあたりは、いつもながら清風の眞劍が言はせ

た言葉といへよう。

又「遼東のゐのこ」といふ小冊子にも、國防策について所感を  
書きつけてゐる。その中に

「この時に當つて、智略あるものは良謀を献じ、勇力ある者は  
戰鬥をなし、財貨の有餘あるものは、財貨をお上へ捧げ、海防  
の費に供すべきである。

かくすることは、日本としては、天祖の神恩に報いることで  
あり、太平の國家の洪恩に報ゆる良民の務である。是によ  
つて、唱義報恩防海無盡講といふものを取立て、戎狄を干  
萬里の外に追拂ひ、神州に其の汚れを受付けぬやうにせね  
ばならない。」

といつた。何とその議論の調子の高いことではないか。  
かうして考へてくると、時代に少しの隔りこそあれ、清風は或  
る意味に於て、たしかに西國の林子平であつたといつてもよ  
からう。

實際に比較してみても、彼の海防論は、子平の著「海國兵談」、  
第一卷水戰の部に關係の深いこと、驚くべきものがある。彼  
がある時、海國兵談を讀んで、

夜半にみる朝日は富士の峰の上。  
といふ句を作つて讚仰したことは、あまりにも有名な話であ  
る。

しかしこの先見の明も實は、後年、嘉永の六年、かの朝霧立罩

めた六月の相州の沖海に、小山の様なアメリカの黒船があらはれるまでは、まだく普通人にはよく分らない議論であつたのである。

#### 四、墓地の探索

毛利氏の祖、大江廣元(覺阿)、季光(西阿)の墳墓の所在地が判明してゐなかつたので、累代の藩主はこれを憾としてゐた。殊に齊熙に至つては深くこれを嘆き、終に村田清風に其の探索を命じた。

清風は命を奉じ、急ぎ鎌倉に到つて百方其の探求に力めたが、何分にも鎌倉幕府の跡は荒廢數百年の久しきに及び、茫乎として夢の跡を探るが如く、其の所在を知るに由もなく、遺憾ながら手を空しうして歸藩したのであつた。

藩主齊熙は益々之れを遺憾とし、更に文化十四年八月、再び清風にその搜索を命じた。

村田新左衛門

右御用有之十六日より鎌倉に御差越候事

江戸當役から渡されたこの度の御沙汰書の壓力は、清風がまだ何年にも感じたことのない重いものであつた。

清風はこの度は、有職故實に長けた、齋藤彦右衛門を助役として同行した。二人は鎌倉に入るや、沐浴潔齋酒肉を絶ち、如何にしても、この目的を果さしめて頂きたいと神明に祈つた。

その頃鎌倉の俗人に大石平吾といふ人があつた。大石はあまり學問の深い方ではなかつたが、その頃六十を少し越えた篤實な人であつた。丁度鎌倉及びその附近の地理に精し

いと聞いたので、早速この人を案内に頼むことにした。

「何しろ大役だが、何分よろしく御頼みしたい。」

といへば。

「……なるほど淨國院御存命中、御墳墓の噂もきゝましたけれど、しかし處は何處とも承りませす……」

といふ。いさゝか雲を撫んだやうな話——。

淨國院といふのは、去る七月に遷化して、今はその寺は無住のよし、清風は一寸氣を落したが、しかしこれによつて、

「絶望ではない。」

との豫感も、たしかに心の一角に持つことが出来た。

そして翌日からは、文字通り全く眞剣な探索にとりかゝり、熱

心な平吾を先導として、此處彼處隈なく尋ね廻る方針を立てた。

かくて或は荆棘を披き、蒙茸を分け、ある時は巉岩を攀ち、斷崖を下り、苦心慘憺殆ど寢食をも忘れて努力した。しかしなかなか發見の日は來なかつた。

鶯谷、扇谷、それからもと廣元が御所伺候によく通られたと傳へる因幡越のあたり探究の頃であつた。夜半惠光院で、墳墓供養をして貰つての歸り、清風は齋藤彦右衛門を顧みて言ふのだつた。

「淨國院の書狀中に山深き處とあるのが、毎日のやうに頭についてゐて……」

「いや御同様に存じます。それに鎌倉の墳墓は岩穴の中にあるのが随分の習はしのやうで……」

二人の話は、全く經驗が言はせる深みへ進んでゆくのを覺えた。かくて鎌倉の古墳は多く其の石が、鎌倉石か伊豆石で、前者は古くみえ、後者は新しくみえることなども知り得て來た。

それから社人岩瀬一學といふ人の話や、明王院縁起やを、參考の手が、りとして、幾日かの努力で遂に待つてゐた光明に出會ふ日がやつて來た。

九月の二十二日—廣元の墓は大藏山に、季光の墓は愈々鶯谷にあることをつきとめたのである。そしてほゞこれと同時に覺阿(廣元)の位牌は相承院に、西阿(季光)の位牌は淨國院に

あることをも発見することが出来た。清風の喜びは言はん方もなかつた。

昔語りきくきくむしる尾花かな。

かう吟じて平吾を先登に、單調と焦慮の交響樂を心の中にきゝつゝ、幾日かを過してきたことを顧みては、一同も亦微笑むのであつた。

清風一行は鎌倉より直ちに歸つて、江戸の藩公に復命に及んだ。藩主の御嘉賞はもとより格別なものがあつた。清風の熱心が一段とお目に止つてきたのはこれからである。思ふに毛利家、この度のことは、單なる私家の私事といふよりも、全く時代的に考へてみて、國家的な一の復古思想の芽ぶき

に外ならなかつた。この祖先の墳墓顯彰といつたやうな精神が生れ出てこそ、防長二州の眼が次第に、暗い／＼歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へ出て行つたわけである。それに関して、その頃清風はよく口癖の様にいふのであつた。

「かの頼朝が幕府を建てたのは、全く平氏の無道を一掃し、朝權を擁護すべき公明な忠誠より發したのだ。そしてその大業の建設は誰の力であるか。これは廣元輔佐の偉功といはねばならぬのだ。かの季光の義舉も同様、廣元の勇志をついだもの、されば今回の墳墓探索は、眞に雪冤彰勳の願望が成つたものだ。」

と。そして此はずつと後々まで彼の持論として續いて行つた。

五、六本杉と清風松

清風は、この度墳墓探索の命を果し得たのは全く、鶴岡八幡の冥助めいじょによるものだと思じてゐた。そこで早速感謝の誠意を表すために、來國らいこく俊しんの短刀を奉納した。そしてこの喜びを永久に記念するために、何かよいものをと色々考へた末、いよ

「松だ！」

と決めて、社前やしろまへにある稚松わかまつの小株を貰ひ受けて歸ることにした。

そして早速に鉢植かみうゑゑにして駕籠かごの中に入れ、東海道を遙々と持歸つた。その時の様子は今でも楫取男爵家に藏されて



ある、小田村伊之助に宛てた清風の書翰中にみえてゐる。  
やがて清風はこれを萩の平安古の邸に植ゑた。彼がその  
時の歌に、

鶴岡の實生の松を移し栽ゑて

千代のかたみに残す琴の音。

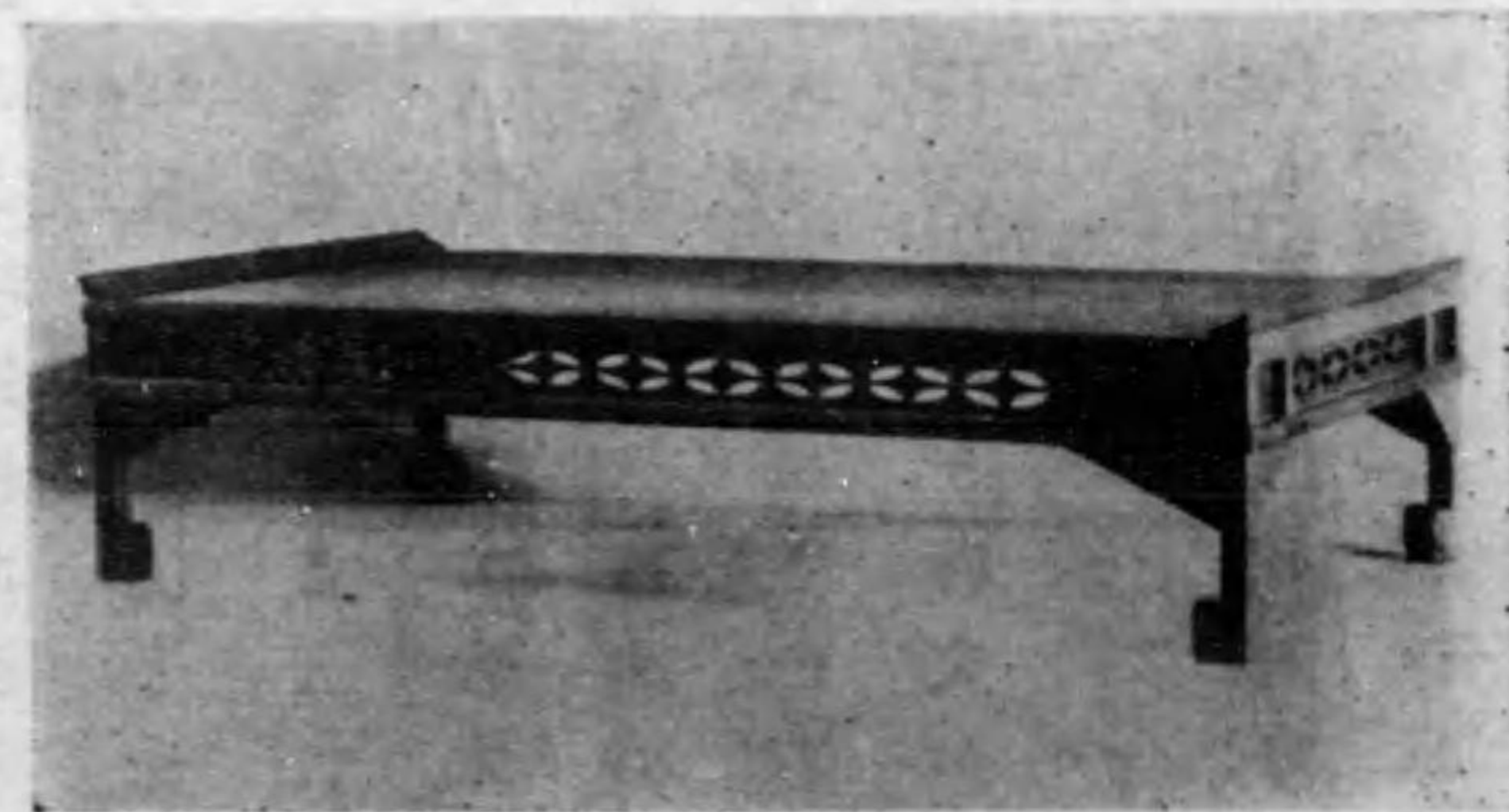
といふのがあつた。蓋し松は千年を経るものであるから、この  
松を庭上に植ゑて置けば、録倉の一事、千年の後であつても、こ  
の松が傳へて呉れるだらうとの心がみえてゐる。

この萩の平安古の邸といふのは、文政三年、翁が三十八歳の  
時、平安古満行寺筋で、香川作兵衛といふ人の抱屋敷を買ひと  
つたものであつた。

さて其後も清風は、二公の墓地改修、  
位牌書替等の事に關して、録倉に往還  
することが數回であつたが、後に淨國  
院の僧照堂は、そのことを記念するた  
めに、又同じく鶴岡の六本杉の餘材を  
清風に贈つて來た。六本杉と稱した  
のは、鶴岡の若宮の後方にあつた一  
六幹の大樹で、

「千年以上の古木だ」

と評判のあつたものであつたが、後火  
災に罹つたのである。



(山口縣立教育博物館陳列) 文臺鶴岡



清風は、贈られた神木を藁りに用ふることは畏れありとして考へた末、この餘材を以て文臺を作らせて、「鶴が岡」と命名し、當年の苦心の概要を其の裏面に識して、秘藏することにした。後かの鎌倉から持歸つた稚松は、漸次に成長して、大木となり、所謂、清風松と稱せられ、明治元年五月木戸孝允は其の樹下に、一基の碑を建て、偉人を偲ぶよすがとした。その石碑の正面には「清風松」の三字が題せられ、今に次の如き碑文が残つてゐる。

村田清風翁、太平無事の世に生れ、武を練り文を修め、陋弊を掃蕩す。我が藩の士風是に於て一新し、以て今日に至る。其の功、其の徳、豈頌揚せざらんや。戊辰の夏、予京師より歸



清風松 (三隅山莊にあり)

りて、翁の舊園を過ぎ、其の撫する所の松を見て慨然として感あり。乃ち此の碑を建て、以て後人の剪伐するを戒む。且翁の舊韻を攀ち、妄に

一絶を題す。亦驥に附するの意なり。

叨に大政に參して鸞臺に入る。

甘じて受く刀槍の我に逼り來るを。

何の日か翁を學び舊里に歸り。

老梅書屋に又梅を看ん。(原碑はみな漢文詩である)

大政一新の歳。木戸大江孝允謹誌。

といふのであるが、世の變遷推移は是非もなく、其の邸宅は他人の所有となり、その松は伐倒されたので、更にその實生の松を、三隅山莊の門前に栽ゑたのが、今日みる大樹、清風松となつて名残を止めてゐるのである。そしてその名高い碑も亦そこに移されて來たのである。

六、藩政改革と進退(上)

豊臣氏時代八州を領してゐた毛利氏は、關ヶ原の戦後遺に防長二州に縮められ、その削られた六ヶ國の租税返納のことがあり、其の他財政は頗る困難であつた。それに參觀交代があり、江戸邸住居のことがあり、世は次第に奢侈の風に長じ、其の上「御馳走」と稱して、徳川幕府から土木事業を賦課せられることがあつて、長藩の財政はいよゝゝ困難になつた。

それに、藩主齊熙が随分長く江戸に居た爲め、費用は莫大なる額を要し、國用も不足を告げるやうになつた。よつて藩主は文政六年に、國元から重臣を江戸へ呼び出し、財政の整理改革を爲さんことを思ひ立つた。時に清風は忌憚なき建議をな

し、當役と當職と、兩署の規則を草して上つた。

「當役」といふのは、藩主に従つて江戸に居り、主として立法部を主宰して、政務をとつた重役のことで、一名行相ともいつた。「當職」は御代官、國元留守居、家老等、萩政府にあつて、行政上の諸務を統督し、租税や金穀の運轉をもつかさどつた重役のことで、一に國相ともいつた。そしてこの二つの役は、共に當時長藩のみに用ゐてゐた名である。

然るに、齊熙は文政七年二月、齡四十二にして隠居し、從弟、齊元、に、長女由美姫を配して、家督を譲り、實子齊廣を其の嫡子とし、自身は江戸沙村の葛飾邸に移つた。

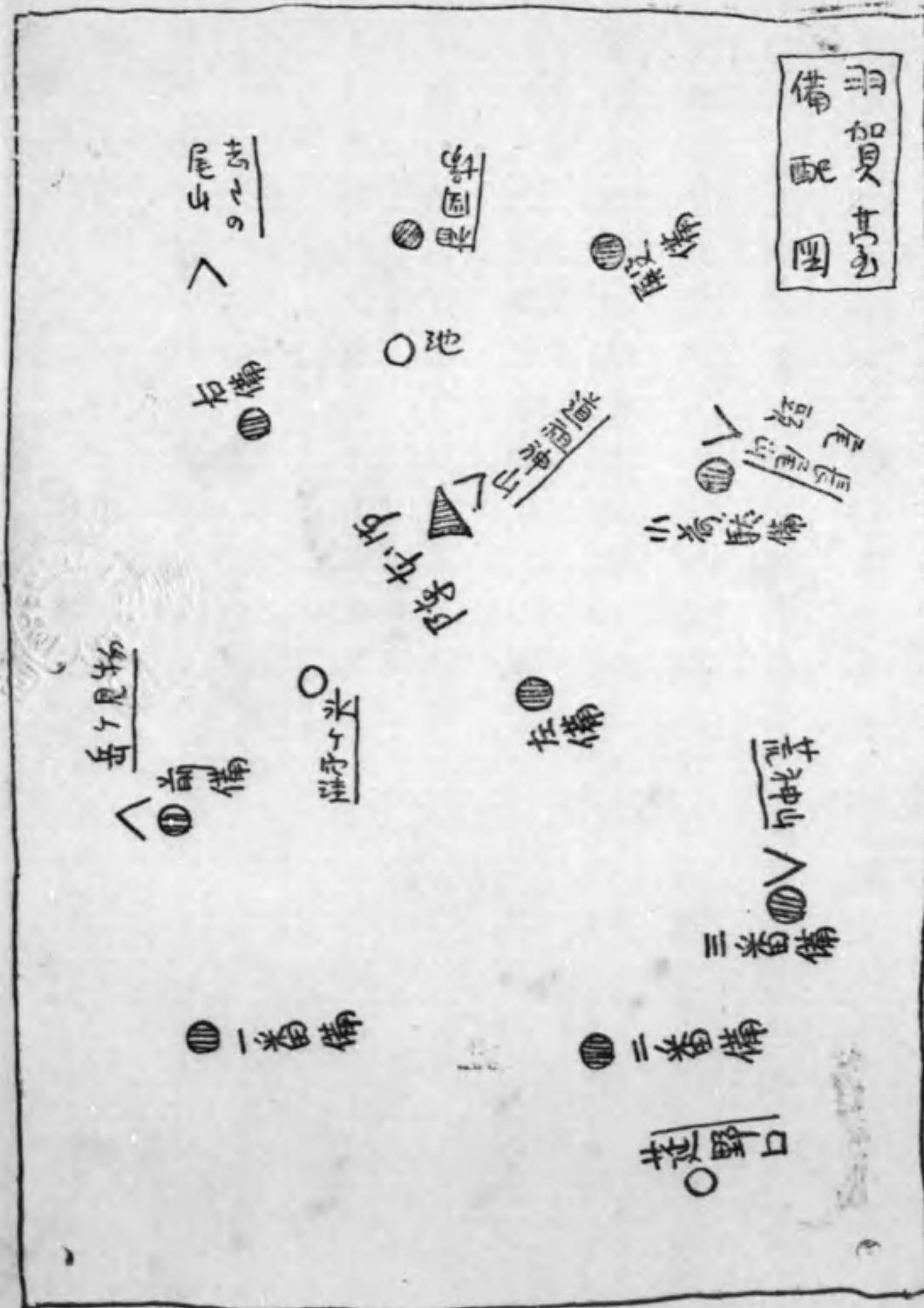
葛飾邸は地面十數萬坪に上り、馬場、射的場等が悉く備り、頼

山陽の記文を撰んだといふ所謂、鎮海園であつて、其の經費は實に莫大なものを要したのであつた。

世は齊元の代となつた。清風は、當役手元役に拔擢せられ、翌文政八年には郡奉行をも兼ねた。「當役手元役」といふのは行相の下にあつて、諸役を總理する役である。

是に於て、清風は至誠その職に盡し、積年の陋弊を一掃したいと力めたが、奈何せん、泰平になれた一般の吏風は、因循姑息であり、目前を糊塗するのみで、清風の整理方針に合はざるところが多かつた。そこで彼は憤懣に堪へず、屢々陳情して辭職を乞ふたが、なか／＼許されなかつた。

越えて十年、また固く乞ふたので、藩主は已むを得ず之を許



した。しかし清風の如き手腕ある人物が、藩府にゐなくなることは最も惜しまれた所で、間もなく召されて矢倉頭人とせられた。矢倉頭人は江戸邸にあつて、金穀の出納、諸種の工事、需要品等を管理する役である。

此の頃は、徳川幕府の全盛時代であり、上下驕奢華美を競つた時であつた。時に老侯齊熙、藩主齊元及び世子齊廣は共に江戸に居たので、其の費用は常に夥しきものであつた。加ふるに世子齊廣は、將軍家齊の第十八女和姫と結婚した、め、萬般の費用は極めて多く、藩費は到底支へられない有様であつた。

然るに、俗吏等はこの間に乘じ、租税に添加して聚斂を逞し

うしたので、人民の苦しみは實に甚しいものがあつた。平素から、

早乙女や百萬石も指の先。

かうした思想を持つ清風で、ある、天保元年撫育方に轉じ、其の七月に當職手元役となるや、愈々之れを痛論して匡濟にとりかゝつた。當職手元役は當職の下で、大事な庶務を處理する要職であるが、其の議は毎に他と諧はざる事のみであつた。よつて遂に又病と稱して職を辭せんとしたが聽されず、漸く國に就いて病を養ふことを許されたのであつた。

聚斂の極は人民を極度の困憊に至らしめ、遂に天保二年には、所在に百姓一揆が蜂起するやうになつた。是に至つて藩

主齊元は清風の前議を憶ひ回へし、特に出で、政務に當るべしと命じたが、清風は固辭して出なかつた。使者は昔孔明を訪ふた劉備のやうに、再三再四、清風の居に到つて強ひて出處を求めた。清風は已むを得ず出で、事を執ること、なり、十月、當役用談役となつた。當役用談役は當役の參謀といふところ、政務に經驗多く、信賴すべき名望ある人を任ずるのが例であつた。

けれども、藩の財政は紊れ、上下共に紛擾を極め、容易にこれを糾正することが出来ない有様であつた。清風は復た病と稱して職を辭した。すると四年には、老侯齊熙は彼れを江戸に召し出して、其の手元役とした。清風は知遇に感激して出

仕して居たが、天保七年五月に至り、老侯は江戸に於いて卒去されたので、退いてまた故山の三隅山莊に歸臥することゝなつた。

天保七年の凶歲饑饉は、殆んど日本全國を通じた古今稀有なる悲惨事であり、長藩は以前より疲弊せる上に霖雨打ち續き、所々に洪水が氾濫し、秋の田の實は殆ど無く、餓ゑて行き倒れの者も多く、百姓一揆も勃發するといふ有様で、これを救済することゝ容易ならざる事であつた。然るに、此の時、藩としては更に容易ならざることが續出した。それは老侯齊熙の逝かれた後、間もなく九月には藩主齊元が萩に於て卒去され、十二月には家督を繼がれた齊廣が卒去されたことである。

この齊廣は、其の師林述齋をして、「亞聖あり」とまで歎稱せしめた、博學篤行の人であつたが、あたら年二十三才にして世を去つたのである。されば、其の世嗣がまだ決定してゐなかつた。世嗣の決定して居らぬ故をもつて、幕府より如何なる壓迫を受けることになるか測られぬので、老臣及び要路の人は喪を秘して議を凝らした。其の間、系統上の關係其の他において意見の相異があり、群議區々であつたが、遂に齊元の長子敬親を立てることに決し、喪を發して家督を繼がすことゝなつた。

この間に於ける清風の苦心は、實になみ／＼ならぬものがあつた。しかし清風は思ふのであつた。かつて日本海の濤

は吾に何を教へたかと、

逆境の中に居れば、荒海に等し

濤に節を砥ぎ行を礪ぐ。

あゝこれ、かつて日本海の濤のうねりに聞きえた啓示の聲ではなかつたか。さうだ、あの聲、あの力だ。さう思ふや否や、彼は確信に輝くやうな面に、きつとした大勇猛心をまた奮ひ起すのであつた。

七、藩政の改革と進退(下)

天保八年不出世の名侯、毛利敬親(忠正公)立つに及んで、夙夜勵精治を圖り、主として藩財政の整理をなさうと志し、天保九年特に清風を任用して、當役、當職兩署の仕組掛とした。

元來、彫蟲の末技にかゝはる小吏でない清風、殊にその身體の横に張つた、眼光の炯々とした、そして

音吐鐘の如く八方に震ひ、

滿堂の群雄皆辟易す。(原詩)  
(改修)

といふが如き威勢のよい清風が起つて、この一大國難の打開策を講じようとする、天まことに防長に與して、其の人を降したといふべきである。

その頃防長の財政は紊亂その極に達してゐた。清風はその原因について、心中に色々と思ひみるのであつた。そして關原の役に負けて、所領八ヶ國を二ヶ國に減せられたことや、その年一旦、收めた六ヶ國の税を返納したことなどの傳草に、或る種の興奮を感じる日もあつた。

が、何といつても實際の近因は、江戸に永住の女儀方の奢侈であつた。それから齊熙の贅澤な土木事業、葛飾の二十萬坪の隠居所なども困つたものだと思つた。

その他洪水飢饉の續出も、齊熙の奥方の將軍家からの降嫁をみたことも、三公の引續いての不幸も、清風にはよい思出ではなつた。しかし一旦藩主に誓つて起つた彼である。時



こそ來れ。士は己を知るものゝ爲に死すとの信念から、  
「ヨシ大改革だ。大儉政だ。」  
かう決心しては、今更の如く拳こぶしを握り占める彼であつた。こ  
れから後、六ヶ年——清風五十七歳から、六十三歳までが、いはゆ  
る防長に於ける天保の大改革のあつた年で、清風の最も活躍活躍  
した時代である。

防長がよく蘇生そせいし、後日眞に維新回天の大事業をなし得る  
に至る礎石せきは、實にこの時に出來上つたものである。思ふに  
この改革は、忠正公が父で、清風が母として、其の間に生み出さ  
れ、育て上げられたものといふことが出來よう。

次々に行はれた改革の諸項しよこは、左の通りである。

- 一、儉政の徹底てい
- 一、士族の負債整理
- 一、産業の奨励しょうれい
- 一、士風の一新
- 一、文武の奨励しょうれい
- 一、學校造士法の改革
- 一、有備館の創建
- 一、武備の充實
- 一、撫育法ぶいくほふの改善
- 一、社寺の整理
- 一、防長地圖の完成

一、羽賀臺の閲武

一、風土記の編纂

一、諸士制度の改正

しかしこれらの中で、清風が一番の苦心をしたものは、何と  
いつても前述の如く、財政の立直しであり、それに次ぐものは  
士風の一新と、羽賀臺の閲武であつた。

當時の防長は、實際官民共に非常な經濟の行詰りを來して  
ゐた。清風がまづ香川作兵衛、小川善左衛門を助手として、城  
内獅子の廊下に於て、調査してみると、長藩の借金が、實に八萬  
五千二百五十餘貫目あり、これを當時の米に換算すれば、殆ど  
百六七十萬石に相當する大負債であつて、防長(三十六萬石)の

負債としては、實に容易ならざることであつた。こゝに於て  
清風は屢々議を建て、

「八萬貫の大敵」

と稱し、日夜、其の困難なる財政整理に盡瘁した。かくて十年  
には抜きんでられて、當役用談役となり、十一年には手元役を  
も兼ねたのであつた。

當時長藩の政府には人材多く、諸職にあるものは皆其の人  
を得てきた。清風はこの時機に乗じて、速かに舊弊を一掃し  
諸般の冗費を省き、士風を作興し、民をして其の業に安んせん  
ことに就いて建議した。議は直ちに嘉納せられ、實行するこ  
とを許されるに至つた。

こゝに於て清風は、民力の休養と、藩財政の自力更生策をたて、所謂天保の儉政を断行し、上は藩主より、下は庶民に至るまで、衣服住居、冠婚葬祭の諸禮、悉く其の分限に應じて、大節約をなさしめ、土木、水利、開墾、製鹽製紙等に亘つて、民力の涵養をはかることにした。其他教育、軍備についても勿論力をいたし、着々と其の實施實行に邁進して行つた。

其の前後には、例の紙幣の燒棄法までとつた有名な話がある。

それはかうである。天保十三年の飢饉後、萩藩は紙幣を濫發した結果、廣島地方其他に於て、機敏な商人は萩藩札百文を、九十六文として取引するやうになつて來た。

これを聞くや、清風は直ちに布令廻をして、  
「何月何日萩西の濱に於て藩札燒捨候間、四民一統見物勝手たるべき事。」といふことにした。其の日になると、見物人は陸續として西の濱に集り、賭の如く觀覽した。

倉庫から取出し、運んで來た紙幣は、逐次に煙になつて行くのであつた。そして三日間に亘つてそれが續行され、終には、紙幣とも反故紙とも知れぬ程に、多くの束が燒き棄てられてしまつた。

同時に萩藩札の價は、再びもとの百の價に回復して、各地方に確實に流通するやうになつたといふのである。清風が機を見るに速く、事を處するに躊躇しないことは、概ね此の例の

如くであつた。

然るに泰平の久しき、動もすれば因循姑息の者が多くて、一時は物議沸騰し、凡庸の徒は却つて誹謗の聲を放ち、兇暴の輩は屢々來つて、清風の居邸を窺ひ、或は夜陰に乗じて、柱を斬り、或は月明に忍んで、石を投じ、甚だしきは暗殺せんとする者さへあるに至つた。しかし、清風は泰然自若として、動かざるこゝと山の如く、その所信の貫徹に力め、少しも逡巡するところがなかつた。かの有名な「國步艱難」の詩や、

そしらるゝ身をば思はず、世の中の  
そしれる人を思ひこそすれ。

の和歌の如き、みなこの際のことであつたと思はれる。これ

によつても、如何に清風が偉大な人物であつたかを、知ることが出来る。

清風は文武を奨勵して、俊才の他藩遊學をすゝめた外、有爲の士を養成するために、藩學明倫館の規模を擴張し、新に改築しようといふことも建議した。又知識は新しきを博く求めたい、時代に後れてはならないといふことを主唱し、好生堂や博習堂などの新設もした。

それから江戸の藩邸内にも、有備館を設けて文武の教習を



(内莊山隅三郡津大) 倉穀貯

なさしめた。「有備」の二字は、孔子の「文事あるものは必ず武備あり」の語にとつたものである。

次に藩内諸士の服制を改定しては、婦女子に絹布の禁止令を發して、儉約を強行せしめ、尙新に法を立て、士族の負債を辨償せしめることゝした。

當時長藩の士籍にあるもの七八千、その多くは公私の負債に苦しみ、家を失ひ身を滅すものが相次ぐといふ状況であつた。清風は大いに之を慨き、會計方の諸役人とこれを謀り、三十七ヶ年賦として、元利合せて償還する方法を實施した。

この仕法によつて、期の滿ちる頃には、藩内の士に一人の負債者もなく、その職に安んずることが出來たので、最初仕法に

對して怨言をなしたのも、後にはみな清風を徳とするやうになつて來た。

その他、淫祠を毀つて迷信を正し、防長二州の風土記草案を出さしめ、備荒貯蓄の方法を改正して、玄米を粃米法に變へたりしたことも、一通りの苦心ではなかつた。

かくして、清風は苟も國利民福を増進することに、寢食を忘れて突進し、その實績を擧げることには餘念とはなかつた。後年舊藩主(忠愛公)が、この二州萬般の改革經綸の木鐸となつた勳しを思つて、

我が家のちりをはらひし松風の

聲はのきばに猶のこりけり。

と嘉賞かしょうしたのは、まことに故ありといはねばならない。

八、羽賀臺はがのたいの関武せつぶ(上)

天保の初、英吉利の船が萩の近海へ來たと、頻りに警報けいほうが飛んだので、防長二州、上下の驚きは一方でなかつた。此の時、清風は、

潮水はまづみは流通りゅうどうす龍動りゅうどうの天に。

言いふを休やすめよ外警けい久しく蕭然せうぜんたりと。

恩威並おんいに建たて、折衝せつしやう遠く、

頼たのまず砲聲たうせいの四邊しへんを驚おどかすを。

潮水流通龍動天。休言外警久蕭然。

恩威並建折衝遠。不頼砲聲驚四邊。

即ち萩城下の水は英京倫敦えいけいりんごんの水と通じて居る、決して油斷あぶらだん

をしてゐてはならぬ」といふ意味の詩を賦して知友に示し、國權を維持し、且つ進展するには、最も海防が大切なることを戒めた。

元來清風は、武備を充實することが、焦眉の急であるとの持論を有し、曩きには神器陣を組織し、更に文化九年と、同十二年の秋の兩度、三島流の戦法を、萩の海上に演習せしめたて來た程であつた。

しかし、其の後蘭法による洋式銃陣の法は、高島秋帆等に研究せられて大に進んで來た。江戸の北郊徳丸原に高島の操練が試行せられ、隊形の整頓、兵器の精銳、服裝の輕便なるを視ては、尙、我が神器陣法に、一大改善を要することの多くあるこ

とを考へてゐた。

けれども、内外の形勢を觀、兎に角、兵員の充實を圖ることは最も緊要なることを思ひ、天保十一年九月、上書して関武の議を進言した。其の要旨は、

「毛利家は代々文武兼備の家柄である。廣元朝臣の功勳、季光君の義烈と共に高く、元就公に至つては、戰國爭亂の世に於いて、天朝崇敬の偉績を顯はされ、亂賊陶全蓋を嚴島に誅戮せられ、輝元公は足利將軍義昭、豊臣秀頼を扶助せられた。そして兵法は匡房卿が源義家に授けられしに顯はれ、時親朝臣はこれを楠木正成公に傳授せられたのである。元就公の節義と武名とは、凜然として千載に芳ばしく、天朝の御願任も亦他

に異なる程であつた。今や外國侵海の形勢は見はれてゐる。將來若し不虞の變があらば、彌々武事を振興して、祖訓を繼承し、父祖の事業を顯はし、天朝の御顧任に答へ奉るべき時である。よつて、諸事は姑く措き、速に講武の實檢ある事が、第一の策である。」

といふ意味で、數千萬言の上書であつた。藩主敬親は大いに之れを嘉し、天保十三年、江戸より歸國せんとするに及び「歸國の上は、先君の遺制にならひ、明木村新建山に獵を行ひ、兼ねて操練を覽るであらう。よつて、それ〴〵其の準備を爲て置くが宜い。」と、當役益田元宜をして、當職毛利房謙に言ひおくらしめた。

よつて毛利房謙は、山田公章、木原通貫等を準備掛とし、明木村の地を相に派遣したが、山田等は公の獵と稱せらるゝのは、必ず操練に重きを置かるゝことであらうと考へ、さすれば、丘陵起伏多き明木の新建山地方は調練に不適當であると思ひ、更に福川村の羽賀臺は其の面積が廣大で、八達ノ地であるところから、これを選定地として復命した。こゝにおいて、天保十三年四月二日、山田公章等は羽賀臺に到り、附近の人民を召して地形を按じ、地圖掛をして地圖を製作せしめて歸つた。

六月三日、公は江戸より歸つて萩城に着するや、直ちに密用方に命じて、陣備、旗幟、相圖方法、隊伍兵數等について二案を作



らしめ、用談役村田清風、手元役中谷章貞等をして其の一案を撰ばしめ、九月十六日早曉、行國兩相府の士を随へて、親から羽賀臺を視察し、明年四月一日を以て、大訓練閱兵の期日と決定した。

此の頃、長崎に於て高島秋帆に就いて、西洋銃陣の法を學んで歸藩した粟屋翁助、井上與四郎等は、西洋銃陣は火器、銃陣共に在來のものに比して優れては居るが、今直ちに其の式の火器を得て、士卒に供給することも出来ないもので、さしあたり隊伍の編制と、進退動作を習練するが宜いとの意見を建議したので、其の練兵の方法を施すことを採用することゝしたが、期日の切迫と、諸種の事情によつて、とうとう新式の練兵を行ふ

までには立至らなかつた。

軍馬の購入、軍器の整備、服装の新調、一藩の上下は實に忙殺される有様であつた。そして處々に、訓練の豫習、豫行が引き續き、菊ヶ濱や小畑等には、太鼓と鐘の音が断える日のない程であつた。斯うして其の年は暮れた。

明くれば、天保十四年正月二十八日、藩主敬親は、毛利熙頼を殿中に召し、更めて習練總奉行に任じ、采配及び令條を授け、備頭、旗本、殿軍等それ々の部署を命じた。

九、羽賀臺の関武(下)

天保十四年四月朔日、阿武郡羽賀臺大調練の日は来た。  
清風の建策によつて、長藩三百年、長く續いてきた泰平の夢  
は破られんとした。

ガーン……………

ガーン……………

ガーン……………

夜半の頃から五ヶ所の勢樓で、相圖の三つ切の鐘を打ち  
はじめた。これにそへて寺々でも、待合せたやうに鐘をつきた  
てた。かくて

○一番備……………弘法寺

○二番備……………住吉社内、濱邊

○三番備……………菊ヶ濱

○前 備……………大馬場

○御旗本……………大城、四本松

○殿 備……………御木屋の下

とそれ〴〵豫定の如く整列した。常は入相告ぐる哀れさも  
さめて、防長の心の緊張を一時に此處に集めたかの感があつ  
た。肅！とした空氣、軍紀、軍律、さうだ、それはたしかに、數百年  
來絶えてなかつた緊張であつた。

やがて出發！行軍の調練は開始された。第一番の備より  
順次に進發、一一途中の軍令の厳しさが、特に目立つた。

斥候

大組鐵砲組一組、大組弓組一組

一。番備。 總人員千九百七十七人、馬八十五頭

備頭毛利元美の從者二百二十七人、筆者右筆各一人、使役

三人寄組十人、大組一組、證人一人、醫師二人、目付二人、小荷

駄馬三十一頭、小荷駄見合二人

二。番備。 總員千七百九十二人、馬七十頭

備頭毛利親倫の從者四百十五人、筆者右筆各一人、使役三

人、寄組十人、大組一組、證人一人、醫師二人、目付二人、小荷駄  
馬二十五頭、小荷駄見合二人、

三。番備。 總員千九百五十七人、馬七十六頭、

備頭宍戸親基の從者六百十八人、筆者右筆各一人、使役三  
人、寄組十人、大組一人、證人一人、醫師二人、目付一人、陸目付  
二人、小荷駄馬十九頭、小荷駄見合二人、

前備。 總員二千二百一十一人、馬八十六頭、

犇雷車三輛、木砲相圖方三人、大組一組、證人二人、大組鐵砲  
組八組、同弓組二組、使番二人、軍貝太鼓鉦の手各二人、徒士

九人、使役二人、目付二人、陸目付三人、總奉行毛利熙頼の從者二百八十三人、筆者二人、助筆二人、手元役及び習練掛繪圖師一人、老中根來主馬の從者八十六人、大組一組、醫師二人、小荷駄馬二十六頭、小荷駄見合二人

○

旗本備 總員四千六百二十五人、馬百六十二頭

大帳一本、鍵帳二十本、旗奉行一人、手廻鐵砲組一組、同弓組三組、先手となり、右備には口羽丹後の大組一組、左備には志道安房の大組一組を備へ、藩主親から行相益田刑部下の諸役人、諸近侍を前後に隨へて、列中に入る。

○

殿備 總員千四百三十五人、馬五十五頭

備頭毛利元潔の從者三百三十人、筆者右筆各一人、使役二人、裏判役一人、遠近付六十人、小荷駄馬十頭、小荷駄見合二人。

○

小荷駄備

防長二州の精銳來り集るもの、實に一萬三千九百六十三人。馬匹五百三十四頭、何と大なる計劃ではないか。萩城の東へ向ひて約三里、行くときは陣となり、止れば營、單合の形勢、奇合の樞機、人馬相連つた様は、鬼神も爲に避けるといひたい壯觀であつた。



やがて諸軍羽賀臺到着と同時に、御旗本の陣所は、道祖神山に當てられた。羽賀臺は實にその廣さ方一里、八達の臺地である。

藩公當日の扮装は

赤銅で家紋を打つた梨地の陣笠に

大袖の付いた大和錦の陣羽織

熊の皮の行膝

小袴の裾もたをやかに

黄金作の太刀、小尻に鞘をかけ

紅梅と名づけた栗毛の大馬に

平蒔繪におもたか打つた鞍

紫の尻がひ――

といふ威儀いかめしいものであつた。今龜山公園の正面に見られる忠正公の銅像は、これをあらはしたものである。かくて本陣、左右備のもの以外は肅々として、

一番備……大井口

二番備……黒川口

三番備……荒神山

四番備……物見嶽

殿備……長尾山

小荷駄備……三所峠

とそれらの位置について関武を受けた。

終始一貫、狼煙、篝火、提灯の用意に至るまで、手落なく、旌旗天を覆ひ、鉦鼓地に轟き、規律厳正、一絲亂れず一進一退、節度に當り、當時他藩に於ては見ることの出来ない、一大壯觀が展開されたのであつた。



足具の風清  
(のもるせ用使に臺賀羽)

この時清風も、軍装して馬に跨り、家の子郎黨を従へてその

隊列に加はり、羽賀臺まで出陣した、時に六十一歳。その際、度途中で、暗殺されるだらうとの噂が喧しかつたが、幸にその災難は免れた。

人多くして做し得ず。

人少くして做し得ず。

とは水滸傳にみえる眞用の言葉であるが、まことにその通りである。人が澤山あつても何も出来ない。といつて少くても何も出来ないが、そこには必ずや清風の如き、吏材の出現が必要なのである。

般々たる城鼓大門開け。煙火星の如く羽臺に向ふ。

數萬の隊兵一語無し。了知す益々多々を辯じ來るを。

股々城鼓大門開。 煙火如星向羽臺。

數萬隊兵無一語。 了知益辯多々來。

とは清風其の日の壯舉を終了し得た時の所感であつた。この長藩未曾有の大壯舉こそ、前にもいつた如く、やがて國防上に一大異彩を放ち、四境戦争に於ける大捷となり、伏見鳥羽の戦の勝利となり、東北戦進軍の中堅となり、王政維新の大業を翼賛する一大基礎となつて行つたのである。

次いで清風は屢々儉約令を出し、金穀、兵器貯蔵の制を改めた。そして江戸の鶴歩に一大倉庫を構へ、米穀數千石を貯へ、麻布邸には武庫を設けて、銃砲、刀槍より甲冑に至るまで、邸内の人員に適ふやうに充實せしめ、一旦緩急あらん日の爲めに備へ

て置いた。

「長州さん荷物はしんから金かい、金ぢやい、ノ〜。」

とは後年東海道五十三次の運搬人夫、雲助等が長藩の長持等を運ぶに當つての歌謠の囃聲であつた。蓋し其の中に武器が容れられて、逐次江戸に遞送されてゐたからであらう。

後、嘉永六年六月、北米合衆國の水師提督ペルリ、軍艦四隻を率ゐて浦賀に来るや、海内愕然として邊海防禦の事に狼狽した。幕府は長藩に命じて大森を成らしめた。長藩は直ちに倉庫を開き、五百餘人の鎧仗悉く備へ、隊伍整々、砲三門を曳き、一字三星の旗を朝風に吹き靡かせて江戸を發した。沿道の庶民は其の隊伍の頼もしさに感嘆して、

「長州さん頼みますせ！」

「親玉！」

等と連呼して休まなかつたといふ。

こゝに於て、一藩の士民、始めて羽賀臺訓練の功果の大なりしことを回顧し、村田清風の遠謀に對して、今更の如く嘆賞の聲を放つに至つた。

一〇、政客往來

清風は平生客を好む性であつたから、その國にあると、江戸にあるとを問はず、日夜訪客の絶えることがなかつた。殊に清風が愛國家で、酒談茶話も、常に勤王、富國、強兵の事に及ぶといふことが、彼の盛名を藩中のみならず、全國に向つて有名ならしめたのであつた。

彼の横井平四郎、小楠が天下を周遊して、長州に來た際の如きも。先づ清風を訪問してゐる。左にその好逸話を紹介しよう。

小楠の來たのは、澤江の三隅山莊である。その前嘉永中に宮部鼎藏が、肥後から來て、小楠はその後に、徳富國友、今一人と



都合四人づれで山莊を訪ねたのであつた。一行は其後、御茶屋治郎吉といふ旅亭に二三日ばかり宿泊して、毎日清風の許を訪ひ晝夜種々の論説を聞いて歸つたものであるが、その最初の應對問答の様子が面白い。

庭の松の梢が、時折さや／＼と微かな音を立てるので、僅かに風があると知るばかりの午後であつた。砂に印された松の影とともに、庭は閑寂といふべきさまである。その時それはほんとに突然のことであつた。

「肥後から横井平四郎氏が來られました。」  
と折柄來合せてゐた、三戸茂内の取次ぎである。

「ナニ横井氏が來られたか。」

平素と變はり、今日は清風が自分でこれを玄關に迎へ、早速客間に請じて、

「よくこの僻地まで……」

と挨拶も手輕に、一見舊知の如くに扱つた。

清風はまづ小楠より、時世に關する談論を聽くことゝした。小楠は清風の快く面談してくれたことを喜び、長藩には初めて來たこと、他藩に於ても、眞の知己のあつたことなどを物語つた。

小楠の談論が、一わたり濟んだ時、清風はおもむろに問ふのであつた。

「横井氏、貴下はこれまでに、幾つの藩を御視察なされました

か。そして視察は如何なる方法をとられましたか。」  
と。小楠はいと得意氣に、

「視察は十餘藩に及びました。方法としては、其の藩に入つては、先づ其の藩の顯官二三に就いて其の大要を聽き漸次に見聞して細部に……。」

と應へた。清風は微笑をもらし、右掌を開いて緩やかに自分の胸のあたりで振り出した。

見てゐた三戸茂内は、「そろ／＼翁の本領が出るのだ。」と想つて居た。

果して清風は正しく身構へて、例の底力の強い聲で語り出した。

「横井氏、それでは甚だ不足です。失禮ながら大體偵察とか視察とか申すものは、他人の耳目で得た所を、自分の耳に聽くばかりでは十分に參らぬ、どうしても自分の目、自分の耳でもつて見聞し判断せぬ以上は、眞に其の藩の文武の盛衰、政道の程度は分りませぬ。……」

先づ、其の藩の城下に入つては、其の城下の隅々までも、仔細に巡覽することが必要で、これによつて、古道具屋が多ければ、其の藩士の貧亡が知れ、玩具屋が多ければ文弱さ加減が知れ、武術の道場が多ければ武術が盛であることが知られるといふ道理です。二三の顯官に就いて、其の藩の形勢を知らうなどとするのでは、決して十分とは申されませぬ。」

と、これには流石の小楠も、清風の見識の非凡なるに感じ、酔へるが如く耳を傾け、

「御高説尤もです。これはよいことを承りました……………」

と辭を低うして、更に教を乞ふのであつた。

その時丁度客間の床には、武内宿禰が御幼少の應仁天皇を抱き奉つてゐる畫幅が懸けられてあつた。清風はそれを指しながら語をついだ。

「横井氏、貴下は此の武内宿禰の苦衷を御察しなさるゝでせう。當年、外には三韓征伐のことがあり、内には熊襲の變があり、其の上、禍は蕭牆の内にも起つて忍坂王の叛もあつた。宿禰は此の時、畏れながら神功皇后と、幼天子とを輔け奉り、

内外の大艱難に當つた人傑である。千載の下、其の誠忠の程を想ふと、實に形容する言葉もない次第、現今外國の事類に起り、内には各藩の一致を缺ける有様、實に痛心の事ではありませぬか。日本帝國の臣民たるもの悉く皆、この武内宿禰の心を以て、各自が報國盡忠の至誠を捧げねばならぬ秋と思ふのであります。」

聲は次第に悲痛を帯びてふるひ、双頬には涙が流れてゐた。小楠は清風の忠誠と、抱負の大なる事とに感嘆して返へす言葉もなく、尙其の語る所を傾聽して、日暮に至ることも忘れて居た位であつた。

讀者はこの話の中に、清風の勤王意識の閃きと、崇拜人物に

ついでの一端を、察知することが出来たであらう。殊に彼の崇拜人物については、この外に北條時宗、林子平の二人があるのであつて、彼はこれを合せて、常に三友と信じてゐたらしい。

ある時の詩に

何の幸ぞ生を稟けて日域に生る。

忘るゝ勿れ造次の一忠誠。

頭を回らせば今古親友多し。

武内、時宗、林子平。

何幸稟生生日域。勿忘造次一忠誠。

回頭今古多親友。武内、時宗、林子平。

といつてゐるのがあつた。まことに偉人を崇拜し、敬慕するこ

とは、人間の本性ではあるが、眞によく偉人を崇拜するものは、亦偉人である。一世界を通じて、この傾向は古今一貫してゐる。トーマス・カールイル言はずや。

「偉人は人間の首領である。世界に於ける既成の事物は、皆偉人の思想から出た外部的結果である。」

と。いかに世が大衆に傾かうと、偉人たらんと志すものにとつて、偉人崇拜の事實あることに變りのあるべきはづはない。清風の政治上どの業績をのぞいてみても、「斷」の一字のよく光つてゐることなど、たしかにこれら崇拜人物の面影——殊にその膽甌の如しと謳はれた、相模太郎時宗、そつくりのところがあるではないか。

又周防國遠崎、妙圓寺の釋月性は、勤王の志士で、海防の必要を説教して各地を巡り、世に海防僧と稱せられ、後に贈位せられたほどの傑僧であつた。かの有名な

男兒志を立て、郷關を出づ、

學若し成らずんば死すとも還らじ。

は彼の詩であるが、或時巡錫して萩に出た時のこと、心友秋良、敦之助から、

「今日は富士山の絶頂に遊びたいから、お待ちしてゐる、」との手紙が其の宿所に届いた。

月性は、妙なことを言つて來たものだと思ひながら、秋良を訪ふてみると、村田清風の所へ行かうといふのであつた。月

性はかね／＼清風の高名を聞いて、いつか一度は面會してみたいものだと思つてゐたところであつたから、成程富士の山頂は奇抜だと大いに喜び、同道して平安古の清風宅を訪うた。座敷に通つてみると、床柱の前に、坐布團が二枚重ねてあり脇息がそれに添へてある。それは清風自身の坐るところで、秋良と月性との二人には、坐布團も何もないのであつた。二人が座に着いて、暫く待つてゐると、清風は奥から出て設けの席に着き、寒暖の挨拶もせず、

「眞宗坊主の月性といふのはお前か。」

と出し抜けに言つて睨みつけた。清風は月性の人物を観察するため、態とさうしたのであつた。

「はい、私が月性であります。初めてお目通り致します。」  
月性もおちつき拂つて應へた。

清風は侍女を呼んで、一つの箱を持ち出させ、中から書冊を取出した。それは淨土眞宗に尊重する所謂「御文章」であつた。彼はそれを月性の前に取り出すや、

「僧侶なれば、定めし法義の事は詳しいであらう。今日はこの白骨の御文章を講じ聽かせて貰ひたい。」

何處までも峻嚴な態度であつた。勿論これには深い意味と諷刺があつたのである。然し月性もさるものである。少しも激する色を出さず、

「愚納は、今日は御文章の講義を致しに參つたものではなく、

目下の急務、海防のことに就いて……」  
と言ひ出した。かくして二州東西に於ける海防の兩雄は、はしなくもその肝膽を吐露し合ふことになつたのであつた。それから後月性は數回三隅山莊を訪ねた。ある時は詩作について、かういふ逸話も残してゐる。

「貴僧は詩作に優れてゐると豫て聞いてゐた。私の爲めに、此の眼下に展開してみえる山水について、澤江の八景を選んで詩にして貰ひたい。その間に私も詩作を試みることにしよう。」

清風がかういふと、月性は直ちに縁側に立出で、詩とすべき風景を選ぶべく、眼下に見える繪のやうな大津島山に對した。

常なれば詩想、油然として雲の如く湧き、筆をとつて紙に對すれば、恰も囊中のものを出すが如く、百篇の詩も立どころに成る月性も、其の日は何故か詩想纏らず、意に満たざるものばかりで、如何することも出来なかつた。

其の間、清風は庭下駄を鳴らして庭中を逍遙してゐたが、少時の後座に歸り、

「妙圓寺、詩は幾篇出来ました——自分は五六篇を得た。」  
と言ひながら、筆をとつてさら／＼と料紙に認め、月性の前に投げ出した。

月性は靜かにその詩稿を取り上げてみた。と、その多くは韻字も平仄も顧みず、詩といふには餘りに亂暴なもののみで

あつた。

しかしその大膽にして、字句の細末には一切拘泥しないといふ態度に、一驚を喫すると同時に、その頼もしい大人物たることが心強く思はれて、益々尊敬せずにはゐられなかつたといふ。

その日月性は、遂に一篇の詩も清風に示さず、宿所へ歸つて行つた。そしてその翌日には、澤江十二勝の詩と、外にかの有名な

猛火轉輪黑煙を掲ぐ

政客往來  
の詩一篇の淨書とをして、再び三隅山莊を訪うたのであつた。かうしてゆく中に、清風と月性との心交は、愈々深いものと

なり、遂に彼は起つて、海防に關する月性の説法が、各地に開筵せられる様に、援助するにさへ至つた。

さて次に清風が、常に念頭を離さなかつたことは、「政治は要するに基礎の確立が第一だ。」といふことであつた。彼が嘗て或る人に贈つたといふ次の句は、この心境を如何にもよく表現してゐるといへよう。

治まれる世は富士山の姿かな。

それによく似た逸話で、浦靱負の家老、秋良敦之助が清風を訪ねた時の談をも記して置かう。一わたりの政談が終つた時、秋良は清風に向つて言ふのであつた。

「結局のところ、治國の要は那邊にありませうか。」

清風に對する其の日の最後の質問であつた。清風の答は頗るふるつたものである。即座に

「これだ。」

といつて示したものは、

滯穂ある田は靜かなり鶴の聲。

この一俳句であつた。敦之助は一かへり二かへり、口の中で讀んでみて、はたと膝を打つた。

「ナル程、滯穂ある田は靜かなり……鶴の聲……」

如何にも其處には、農業立國の政策と、その結果にみられる、鼓腹撃壤の平和な農村の狀況が、髣髴として浮んで來るのであつた。



「まことに治國の要でございますな。」  
そして清風も彼も、心中に數年前から打續いた飢饉の慘狀と、俗吏どもの苛斂誅求の暴狀とを、ひとしく渦卷のやうに描いてゐた。

清風は更に語を足した。

「……苛政が悪いのです。」と。

こゝで吾等は、かの天保の大儉政を斷行してきた清風の心の奥底に、この温い和熙の境地の存してゐることを、想ひみねばならない。

一一、尊聖堂

文教を興し、武備を張り、財政を整理し、民心を緊張せしめ、防長二州の面目を一新せしめたる偉人、村田清風が老衰の故を以て職を辭し、大津郡三隅山莊に歸臥したのは其の歳六十三の時、即ち弘化二年のことであつた。

曾て大関に陪す羽加の臺。

心決す刀槍の骨を洞して來るを。

豈量らんや殘生舊里に歸り、

恩光深き處閑に梅を看んとは。

曾陪大関一羽加臺。心決刀槍洞骨來。

豈量殘生歸舊里。恩光深處閑看梅。

の詩は、實にこの時に於ける述懐の作である。

彼は常にこのやうに刀槍の身邊に群り來ることを覺悟し、一身を國の爲めに投げ出して、政務を執つたのであつたが、中にもかの羽賀臺閱武のことは、決死のことであつたと思はれる。

然るに幸にして、無事に餘生をその舊里に養ふことを得るに至つたのは、亦恩光の深きによることゝ喜び、かく主恩の深く且つ大なるを感謝したのであつた。

然し彼清風は、猶安閑として餘生を送ることを欲する者ではなかつた。彼は邸内(三隅山莊内)に校舎を設置し、家傳の孔子像を安置して、尊聖堂と名づけ、藏書數千卷を出して、近郷の

子弟を集め、文を修め武を講ずる所とした。

その中には無論、平素清風の大切にしてゐた、儒書、歴史、地理、經濟書類、理化學の諸書、西洋書籍の翻譯物から、兵備教育などの書もあつたのである。

一體で清風は好んで青少年を愛した。そしてこれを誘導し、督勵した。それについてかういふ話もある。一日萩の城下で五六人の書生が相會した時のことである。談たまたま清風のこと及びや、その中の一人が、

「十分に腹案も出來てゐて、あゝも言はう。かうも語らうと意氣込んで居ても、どうも彼の村田翁の前へ出ると、それが出て來ぬ、喉へ支へるやうになつて」

といふ。次の一人が、

「然うちや、お主も其慶事があつたか、俺も其慶目に逢ふてしたゝか膏をとられた経験があるぞ。」

と語る。すると、其處に居た青年、赤川淡水(後に贈正四位佐久間佐兵衛)は、

「莫迦な其様な事があるものか、それは勇氣がないからの事ぢや、吾輩は誰の前へ出ても、自分の所信を語るに躊躇したことはない、千萬人と雖も吾れ往かんぢや。」

と大元氣である。

「さあ？吾輩も然う考へて行つたのではあるが、其の場に臨むと然ういかぬから仕方がないぢやないか。」

と又他の一人がいふ。

「よし」と赤川はいつた。「では僕が翁に面會して堂々と意見を述べて見せよう。」

とまさに意氣當るべからざるものがあつた。

次の日、赤川は三隅村に山莊を訪うた。門を入つて玄關に立ち、

「物申す！。赤川淡水であります。」

高聲に案内を乞うた。清風は親から立ち出でて打ち笑ひ、

「赤川で淡水とは奇怪な者ぢや、餘人は其の聲で瞞すことが出来るか知らぬが、俺は乳臭い貴様等の虚喝に驚きはせぬぞ。ハ、ハ、ハ、ハ、が、よく来てくれた。さ、上らつしやい。」

と機嫌よく座敷に延き、酒肴を出して饗應などした。赤川は自分の所論を述べんと思つたが、述べんとすればするほど咽喉が塞がり、汗が背中に流るるを覚えて、遂に一言もいふことが出来ないのであつた。

赤川が辭し去らうとする時、清風は、

「若い人の勇氣のあるのは賞すべきことである。學問を勵むがよいぞ。書生の時代は唯勉學が第一ぢや、兎角半途にして立消えすることが多くていけぬのぢや。歸つてよく勉強せよ。又分らぬところがあればいつでも尋ねにきなさい。空元氣を出すな。空元氣では、物の役に立たぬものぢや。」

と、いと懇ろに諭し、且勵ます所があつた。淡水は慇懃に禮を述べて辭し去つた。

清風はよく、このやうにして、將來を囑望せるものについて、特に一痛棒を喰はして、これを鼓舞振作する風があつたの



尊聖堂の孔子像

で、後々では皆清風の一喝を受けのるを、却つて光榮と感ずるやうになつたといふ。

尊聖堂には、春秋二回、釋典の禮を行ふて、孔子を祀ることがあつた。しかし清風の孔子を尊べるは、「文事あるものは必ず武備あり」と言つた夾谷の孔子の精神が氣に入つたからのことである時、勤王畫家と稱せられてゐた浮田一蕙に囑んで、劍を按じ、裾を攝し、怒を含んで、階を昇る、夾谷の孔子を描かせて、これを壁間に掲げた。

又有名な尊聖堂の四聯といふものをかゝげて、教訓の資料とすることにもした。それは次の如き文句になるものである。

尊聖堂の四聯

尊重文道一教ニ忠孝一

嘯雨

○ 忘れんと思ふ心のわすられで猶想るゝ海のにし喜多

振起武風一威ニ戎狄一

清風

鶴岡の實生の松を移栽て千世のかたみに残す琴の音



(畫氏田浮)子孔の谷夾

窓觀紫海瀾

西北の風防して幕打てよ吾日本の櫻看る人

清風

門對形峯旭

移栽る花は心の匂なり剪るな手折な千春經るとも

嘯雨

これから少し、清風の教育觀について、記してみよう。

或る時、小田村伊之助(後に揖取素彦男爵)が清風の教を請ふたものである。その時彼れは從容として言つた。

「御身等のやうに、孔孟の學を講ずるに、石佛を麻繩で縛つたやうな、窮屈千萬な學問をしてゐては、何の役にも立つもの

でない。吾輩は場合によつては、孔子や孟子の頭上に鐵拳を加へてやる覺悟を有つてゐる。」  
と、これを見ても、時の腐儒等の孔孟崇拜の意味とは、大に其の趣が異つてゐたことが窺はれ、經世濟民の活學問であつたことが知られるであらう。

彼は又日常、弟子達に向つて、  
「大丈夫は當に一藝一能の士であつてはならない。天下の衆務、古今の事蹟に兼通しなくては駄目だぞ。」

とも教へた。又人物を百工にたとへて、  
「人材はこれを百工にたとへると、大工の上手なものもある。――その大工の中でも、彫物のみには上手なのがあり、棟梁の材

のものがあつり、よく／＼區別して使ふべきである。然るに世にはよく、大工を左官に使ひ、又疊刺を張付に使ふことが多い。

在上の人も、己が常に名言善行の人と仰がれ、賞せられようとして、小人島から小人を求めてきて、己れ大人國の人の心得であるものがあるが、これは忠臣とはいへない。」

と言つてゐるのなどは一寸面白い譬喩ではないか。だが更に面白い清風一流のものに、「四峠の論」といふのがある。彼はいふ。

「萩は西の一方、日本海に面し、他の三面は山脈に包圍されてゐる。一面は海、三面は山で、その三面の連峰の間には四

つの峠がある。即ちその形からいへば一つの坩堝だ。凡そ美點として、一國一地方の國粹は、かくの如き外界から隔離された坩堝的な雰圍氣の中で養成され、保存されるものではあるが、しかし反面大いに反省を要することがある。それはかゝる環境に於ては、動もすると人心が頑固になり、保守的になり、眼光が狭小になつて、小成に安んじ易く、世界の大勢に後れがちになることである。吾等はこの坩堝の長所を利用せねばならない。その中に眠つてしまつたらもう駄目だ。」

と、そして萩の頑固論を、終には何でも名づけて、四峠の論といつて撃退した。だから彼がある時、後進武士の江戸に往く

のを送つた手紙の中にも、

「第一に貴君の江戸行を祝するのは、四峠の論を止められるやうになることを喜ぶからだ。」

といふ意味のことをいつてゐる位である。一代の英傑が、北海の桃源の住人に下した大鐵鎚として、大いに味はねばならない金言である。

次には清風の讀書觀をうかゞつてみよう。清風は讀書にあたつて、

「吾等は諸聖賢の書を読むに、眼光を以てしなくてはならぬ。彼の文章を通じて、我の心中に射入しなくてはいけぬ。そしてまづ彼我の技倆を比べるつもりで読むことだ。」

と説いてゐる。この終の句、彼我の技倆を比べるつもりで讀みにかゝるといふところは、尋常人の到底言ひ得ないところであると思ふ。古人の所謂「眼光紙背に徹す」といふ讀方よりも、一層心意的で、獨創的の言ひ方ではあるまいか。

萬事が、かういつた調子であるから、亦、彼の藏書印についても、左のやうな面白い逸話が、特に残つてゐるのであらう。

一體、清風は常に有益なる圖書を蒐集した、書庫には當時に於ける内外の書籍の外に、古記録や翻譯物の寫本もあつて、皆では、一萬卷の書を藏してゐた。そして自分が讀むことを樂しむのみならず、他より借覽を請ふ者があると、喜んで貸すことを樂しみとしてゐた。が必ず、



長門國三隅莊 村田氏文庫章

集散任天然 永爲四海寶

の二十二字を刻してゐた。この書籍を愛して自他を益し、永く國家社會の寶となさうとする心は、尋常人の徒に書籍を愛惜するの情とは、大いに其の趣を異にする所があつたわけである。



印書藏風清

一一、晩年

嘉永元年、毛利敬親は、大いに學校の規模を擴張し、學制を改定しようと思ひ、復、清風を起用して、再興掛とし密議に參與せしめた。即ち藩學明倫館重建のことである。

元來萩に於ける明倫館の改造發展の議は、清風等天保年中、江戸在勤の頃に起つたもので、有備館創設の時代であつた。参考のため、水戸の弘道館、會津の日新館、伊勢の有造館、仙臺、岡山、熊本など諸學校の學則、圖面、其の外有益な資料を取集め、數年に亘つて考究したものである。

清風は畢生の大計劃を策して、進言するところがあつた。その規模の雄大なる、實に目覺しいものであつて、今日からこ

れを考へても、驚かざるを得ない程の事であつた。

藩學明倫館は、萩の江向に建設せられた。敷地の總坪數約一萬五千坪、建坪總數約二千七百坪、聖堂を中央に、文武兩道教習の榭寮相並び、射騎の埒、刀槍の舎一つとして具備しないものはなく、殊に水騎練習の設備として、現今のプールに相當する池を作つたことなど、實に當時の諸藩に、類例の少い施設であつた。

又一方内容方面で、新科目として、増設されたのは、國學、數學、洋學、醫學などであるが、随分と守舊派の異議も多かつた中から、よく訓誨懇到の後、やつと他藩に先だつて、實現し得たのであつた。しかしこのお蔭で新知識に燃えた幾多の優秀な人

物を輩出することが出来たのである。

が運命は皮肉である。清風は又病のために、中途にしてこの大工事をみる事が出来なくなり、終に職を辭して三隅山莊に歸つて行つた。

清風は骸骨を乞うて、三隅山莊へ退隱の時、毛利家一門を廻つて暇乞をした。そして、

「織部は三隅へ隱居致しますが、彼處に馬場も造つて置きますから、若様方には、遠乗旁時々御來遊下されますやう、お願ひ致します。」

と言ひ残して置いた。

しかし、一門の若様方は、誰あつて好んでやかましやの村田

の老爺の處へ行く者もなかつた。

或る時、若様達は忠正公から「村田の老爺が折角申し置いた事でもあるから、一度は見舞旁行つて見るが宜いぞ。」との勸めがあつたので、一日三人の若様方は大奮發で遠乗し、三見、宗頭を経て三隅に清風の山莊を訪うた。三人の内の一人は益田彈正であつた。

三頭の若駒が山莊の門に到ると、清風は大いに喜んでこれを出迎へ、請じて客間に上せ、古今東西の名君賢相等の事を談じなどした。

正午に近くなつた時、清風は、

「今日、若様方の御入來、老爺が心をこめたお晝食を差し上げ

ます。」

と挨拶し、家人をして運び出させたのは、切足膳に麥飯を半椀に盛り、澤庵漬の薄黒くなつたのを容れた小皿と、五斗味噌汁、これも碗に半分どころ盛つて載せたのであつた、

「老爺も御接伴致します、まづ御毒味を致します。」と箸をとつて快く食ひ始めた。

「さ、御遠慮なく、御箸をおとり下されますやう。」

清風は重ねて挨拶した。

若様方は、ついぞ一度も麥飯といふものを食つた事がなかつた。見たことも其の時が初であつた。そして、其饜に色の淺黒い、黄赤い五斗味噌汁などを吸つた事もなかつた。どう

も、それが食べられさうになく、吸へさうに思はれなかつた。が、遠乗して來たので可成り空腹でもあるし、清風に對しても箸をつけぬ譯には行かなかつた。二人の若様は顔を歪めて鹽鹹い味噌汁を吸ひ、舌ざはりの龜い麥食を氣味悪るげに食ふのであつた。ひとり、益田彈正のみは、平然として食ふてゐた。清風は若い賓客達の顔を點檢するやうに眺めてゐた。「家康公は大阪冬の陣に、眞田幸村に追はれ危うく民家に隠れられた時、斯様な五斗味噌汁を吸はれました。が、堅忍不拔遂に今日の世をお開らきになつた。五斗味噌汁は他日有名な三河味噌になりました。若様方御空腹でも御座いませう、何卒おかはりを。」

何處までも酷い御挨拶であつた。二人は辛うじて半碗の飯を食ひ了つて箸を納めた。益田彈正のみは「おかはりを需めた。今度は碗一杯に盛つて出させた。彈正は態と舌鼓うつて、それを美事に盡しそして、箸を置いた。

三人の若様等が去つた後、清風は塾生等を顧みて「後日、有爲有望なのはお三人の中で、益田彈正様のみであるぞ。」

といつた。

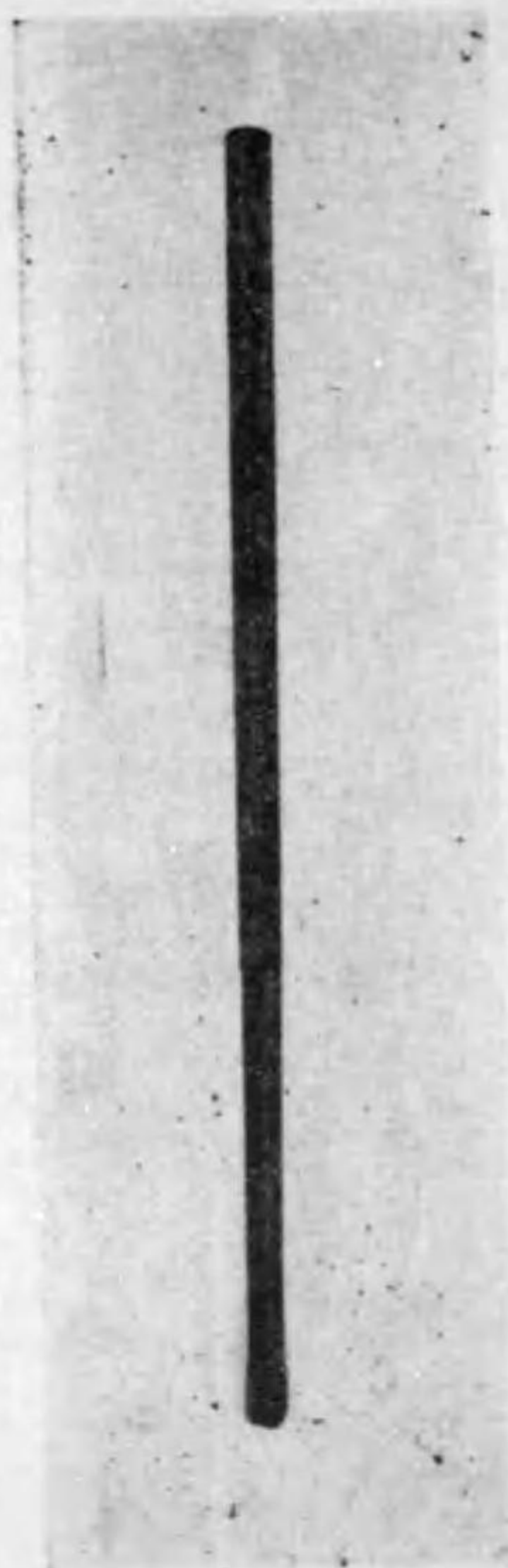
年 果して清風の言の如く、防長の國難にあたつて、益田彈正の活動は目覺しきものがあつたといふ。寔に人よく菜根を嚙み得ば百事なすべし。である。

時に出で時に退き、老を養ふに暇なかつた清風は、又しても退隱を遂げることの出来ない日が來た。即ち安政二年、清水新三郎、口羽善九郎等が大いに藩政を改革しようと思ひ立ち、藩公に請うて更に清風を起し、其の密議に與らしめることゝしたのによるのである。

主君を思ふ清風は、公命の重いことを感じて、又々疾を力めて命に應じた。清風は晩年八九年の間は、中風症に罹り左手の自由を失つてゐた。しかし不幸中の幸で、右手が無事であつた爲めに、筆をとることは最期のきはまで差支なかつた。敬親公は遂に清風に許すに、駕籠のまゝ登城し、殿中に於ては、杖を用ふることを以てした。

これは長藩々制に、未だ曾てなかつた特別の待遇で、清風は公命の有り難さに全く感泣してしまつた。しかし、殿中に杖を用ふる事は、あまりに憚多いといつて、槍の柄を切つて杖として、室内に用ゐてゐたのを廢めて、木で大きな扇子形のものせんしやうがたを製らせそれを杖に代用することゝした。

清風翁殿中にて



用ゐし扇形の杖

然るに、間もなく、痲疾再發して遂に起つ能はず、安政二年五月、暴に不歸の客となつた。噫天なり命なり。時に年七十三。

闔藩上下擧つて、其の死を惜まない者はなかつた。中にも吉田松陰の如きは、此の偉人の死を悼んで、

皇天何の心ぞ我が長防に不幸す。吾が君の眷する所、一朝にして忽ち喪亡す。五朝の老臣勳績多く。明時に遭遇して輝光有りき。曾て機密に参じて衆怒を犯す。子産政を聴いて遂に成す有り。再び起つて弊を革め譽益馳す。君實に路に留まりて衆相慶す。老去つて管領す澤江の勝。詩酒風流日月長し。吾が君養老の意未だ艾きす。強いて衰病を起して朝堂に昇らしむ。先づ知る周邦新に更新するを。七十朝に杖つくの殊榮を賜ふ。今日訃を聞いて唯錯愕す。滿窓の風雨夢茫茫々。

と挽歌を作つてゐる。

誰でも、山口縣大津郡三隅村の澤江に史蹟を探るものは、其の地の大歳山に小形な石の華表があつて、其の奥に、

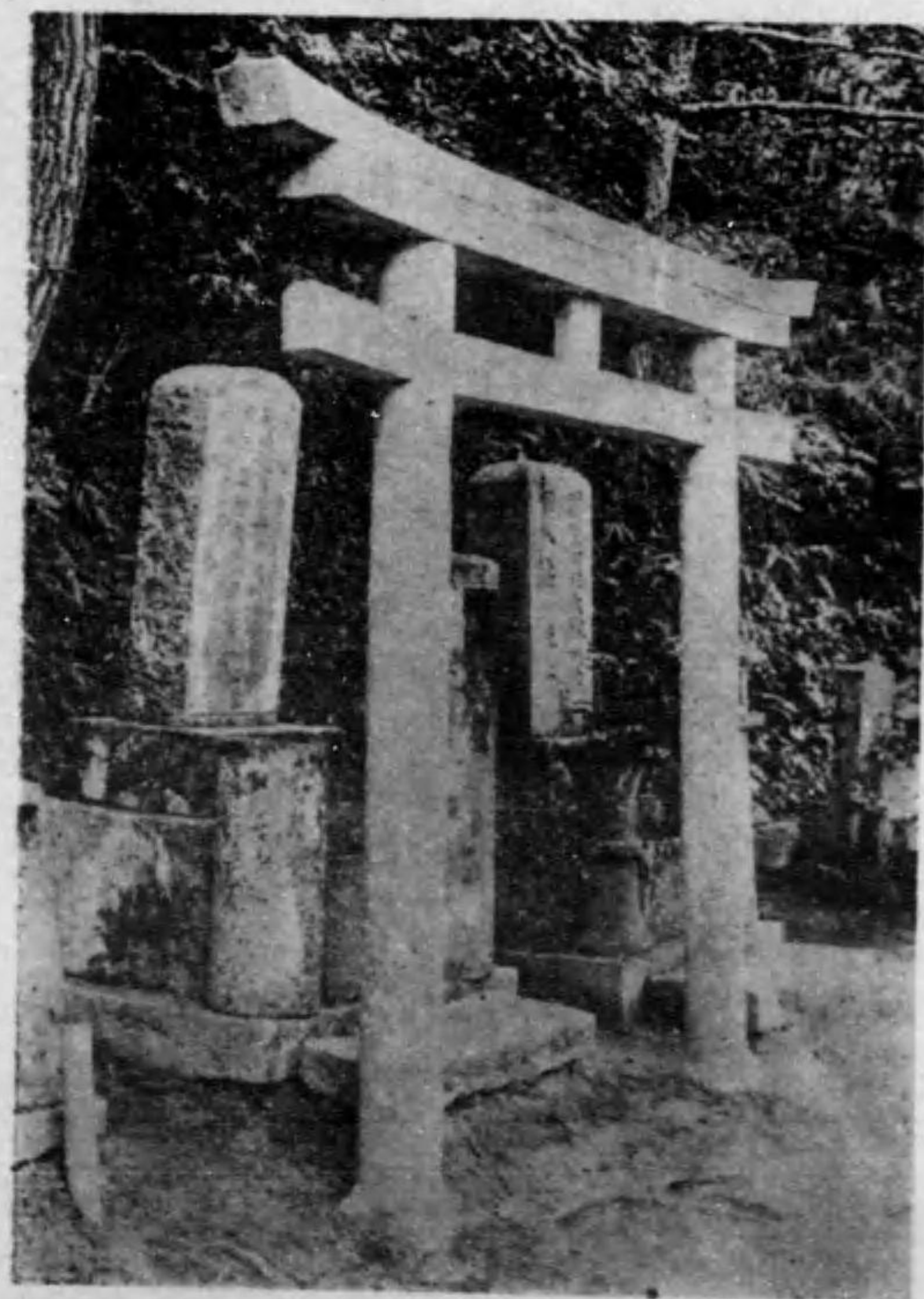
皇天何心不<sub>レ</sub>幸我長防。吾君所<sub>レ</sub>眷一朝忽喪亡。五朝老臣多<sub>レ</sub>勳績。遭<sub>レ</sub>遇明時有<sub>レ</sub>輝光。曾<sub>レ</sub>参<sub>レ</sub>機密一犯<sub>レ</sub>衆怒。子産聽<sub>レ</sub>政遂有<sub>レ</sub>成。再起革<sub>レ</sub>弊譽益馳。君實留<sub>レ</sub>路衆相慶。老去管領澤江勝。詩酒風流日月長。吾君養老意未<sub>レ</sub>艾。強起<sub>レ</sub>衰病一升<sub>レ</sub>朝堂。先知周邦新更新。七十杖<sub>レ</sub>朝賜<sub>レ</sub>殊榮。今日聞<sub>レ</sub>訃唯錯愕。滿窓風雨夢茫茫。

安政二年乙卯夏五月二十六日

故準表番頭村田織部源清風  
同妻進藤氏藤原梅子之墓

明治八年乙亥七月二十六日

と銘せざる墓碑を見るであらう。噫、その地下にこそ、防長二州勤王の大原動力を作り出した偉人の魂は永遠に眠つてゐるのである。



(りあに村岡三郡津大) 墓の風清

一三、遺 芳

清風の遺芳を今に傳へてゐるもので、最も注目し値するものは詩歌であらう。しかし

「清風の詩は散佚してゐる。」

と言はれてゐるやうに、實際にその全部を窺ふことは頗る難事であるが、まづ「清風詩集」を中心に數へてみると、約四百數十首は纏め得られるのである。

その中一番多いのは、清風活動の中心時代、天保年間の作にかゝるもので、それから後のものになるだけ、落付きのみに現るものが次第に多くなつてゐる。これは非常に面白い現象で、まことに古人も言つた如く、「詩は志を云ふ」からであら

うか。

清風の詩を性質上から分類してみると、まづ時事的なものゝ多いのに氣付く。そしてそのいづれもが、國士的な氣概の横溢したものの揃ひである。中で最も傑出した、代表的なものは、前にも一寸言つた「國歩艱難」の詩である。

漢詩

天保戊戌仲秋一日、清風兩相府改革の命を蒙る。性賦(うまれつき)淺劣(せんじやく)加ふるに多病を以てす。大任に堪はず。職を辭すること數回。國相(こくさう)嵩山大夫、慰諭して諒さす。臘月下句人有り、夜門前の石を碎く。又己亥孟春(己亥)春のはじめの月(望夜)十五日の夜、刀を以て門(門)應(門)のそばのひさしの窓を割く。清風(清風)潛(ひそ)かに思ふ。未だ機密(きみつ)の事に參せずと雖も、職名

に因りて、怨を懐く者の爲す所か。心志(こころ)悒鬱(いふ)(心のふさぐこと)として快からず。病益々加はる。再び官を辭す。又諒(あや)されず。辭表を退けらる。一律を賦して自ら遣る。

國歩艱難策未だ成らず。

身を忘れて聊か献す野芹の誠。

才疎にして萬事人望に違ひ。

德薄くして多年世情に負く。

皎月門前誰か石を碎く。

芳梅籬外渠れ檻を剪る。

松を撫して唯託す千秋の後。

清風に問ふあらは我が名を答へん。

(1) 昔野ぜりを献上した故事から、少しの誠忠。

(2) 白々照つた月。

(3) 紅梅の咲いてゐる垣のそこ。



國歩艱難策未成。忘身聊獻野芹誠。

才疎萬事違人望。德薄多年負世情。

皎月門前誰碎石。芳梅籬外渠剪椽。

撫松只託千秋後。有問清風答我名。

と。

この詩は、もとより清風一代の大事業であつた、かの文政天保年間に於ける、藩政大改革の際の苦心の趣をのべたもので、反對者から數回の暗殺を企てられ、庭前までも抜刀で進んできたものがあり、遂に石橋に惡戯を加へたり、門内の未開紅といふ紅梅のあるのを覗いて、其の外の門柱を傷つけたことなどの狀況を、ありのまゝに詠んだものである。

ある夜の如きは清風が書齋で書見してゐると、庭の植込がガサ／＼云ふので、窓を明けてみると、黒頭巾二人、大小刀を横に既に近寄つて來ようとしてゐるので、大喝一聲――  
「オラの首が欲しいなら式臺から上つて來い。顔など隠して盜賊の眞似をする馬鹿はないぞ！」  
と嚇呼したところ、刺客はそのまゝ逃げ去つたといふことである。

さて最後の二句は、自分の深慮のあるところは、とても俗論家には分らないから、今更辯明はしない。只わが心事は萬事この松――鶴岡八幡宮より記念に持歸りしもの――に託してあるから、あの松が枝を吹渡る清風に、私のことを聞いてくれる

なら、名代になつて、我名を音立て、御返事致すであらうといふ意である。

其の他、勤王憂國の赤誠がよくあらはれたものでは、

失題

天戎狄をして扶桑を警めしむ。

振起す慶元淳樸の風。

唯文柔を以て業を墜す勿れ。

神孫は霧島に矛を立て雄なり。

天教戎狄警扶桑。振起慶元淳樸風。

唯以文柔勿墜業。神孫霧島立矛雄。

(1) 西さ北から来る  
にびす。  
(2) 日本のこと  
(3) 誠一でいつはり  
や飾のないこと

(4) ニニギの尊  
(5) 宮崎縣の霧島山

又

陰陽を剖折して二尊に現す。

列神屹立す蒼冥の原。

儒釋を借來りて吾が國を齊ふ。

夢寐忘る、勿れ天照の恩。

剖折陰陽現二尊。列神屹立蒼冥原。

借來儒釋齊吾國。夢寐勿忘天照恩。

又

曾て順天に駕して颶風に逢ふ。

兵を練り學を興す共に窮むるに堪へたり。

(1) 大風。事變、反對論など。

(1) つこと。  
(2) イナギ、イザナミ尊。  
(3) 倉沢、あをうな  
(4) こと佛敎。  
(5) 夢の間も。  
(6) 天照大神のこと。

幾回か死を決して未だ死に臻らず。  
野鶴(ヤカク)小栖(せい)禦戎(ぎよじゆう)を草す。

曾駕(そが)順天(じゆんてん)一逢(いちほう)颶風(くふう)。

練(れん)兵興(へいきゆう)學共堪(がくとも)窮(きゆう)。

幾回決(いくわい)死未(し)臻(しん)死(し)。

野鶴小栖(やかくせい)草(くさ)禦戎(ぎよじゆう)。

又

静に思ふ義勇乃ち城の如きを。

細に味ふ人心忽ち兵と作るを。

正意誠心(1)它(た)の術無し。

永く護る扶桑(2)旭日(きつじつ)の明なるを。

静思義勇乃如城。

細味人心忽作兵。

(2) 世を通れた人の  
小さきすみ家。  
(3) ねびすをふせぐ  
論。

(1) 他の。

(2) 日本のこと。

正意誠心無(2)它術(たじゆつ)。

永護扶桑旭日明。

辛亥(1)晚冬(ご)中七。不(ふ)寝感懷(かんわい)。

咲(わ)ふ勿(な)れ嘲(あざわらひ)る勿(な)れ唐(たう)の樂天(らくてん)。

詩に耽り酒を嗜(たしな)み殘年を送る。

太公(4)元是釣(つり)を垂(た)る(ら)に疲(つか)れ。

諸葛(5)由來田を力(つと)むるに苦しむ。

國を憂へ人を懷(なつ)ひて都(みやこ)て夢に入り。

花に遊び月を玩(あそ)ぶも亦煙となる。

將に言はんとす語らず寒燈の下。

歌は断(た)ゆ魏曹(ぎせう)の伏櫪(ふくげき)篇。

(1) カノトキの歳。  
(2) 十七日のこと。  
(3) 詩人白樂天のこ  
と。

(4) 武王を助けた太  
公望。  
(5) 劉備に三顧をう  
けた孔明。

(6) 晩年不遇なるこ  
とを書いたこと  
ろ。

勿<sup>レ</sup>吹<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>嘲<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>樂<sup>レ</sup>天<sup>一</sup>。

耽<sup>レ</sup>詩<sup>レ</sup>嗜<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>送<sup>レ</sup>殘<sup>レ</sup>年<sup>一</sup>。

太<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>疲<sup>レ</sup>垂<sup>レ</sup>釣<sup>一</sup>。

諸<sup>レ</sup>葛<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>苦<sup>レ</sup>力<sup>レ</sup>田<sup>一</sup>。

憂<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>懷<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>都<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>夢<sup>一</sup>。

遊<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>玩<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>煙<sup>一</sup>。

將<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>語<sup>レ</sup>寒<sup>レ</sup>燈<sup>レ</sup>下<sup>一</sup>。

歌<sup>レ</sup>斷<sup>レ</sup>魏<sup>レ</sup>曹<sup>レ</sup>伏<sup>レ</sup>塵<sup>レ</sup>篇<sup>一</sup>。

熱田

(1) 王孫劍を提<sup>ひ</sup>げて山<sup>し</sup>東<sup>とう</sup>に向<sup>む</sup>ふ。

赫々たる神威草風に偃<sup>ひ</sup>す。

皇州神武の徳を護<sup>まも</sup>るに似<sup>に</sup>たり。

(3) 瑞雲長く繞<sup>めぐ</sup>る熱田の宮。

王孫提<sup>ひ</sup>劍向<sup>む</sup>山<sup>し</sup>東<sup>とう</sup>。

赫々神威草風偃<sup>ひ</sup>風<sup>ふ</sup>。

(21) 日本武尊のこと。  
(2) 東夷の征伐をさす。

(3) めでたい雲。

等はいづれも著名なものである。

似<sup>に</sup>護<sup>まも</sup>る皇州神武徳。

瑞雲長繞熱田宮。

以上の様な詩と全然趣を異にした、眞の風流あるもの、いはゞ純粹文藝的な作品では、旅と温泉と酒などに關するものをあげなければならぬ。今こゝには、三隅山莊に程近い「涪溪」十勝「中」の二三を紹介してみよう。涪溪は今の深川湯本温泉のこと、春は新樹に、夏は清流に、四時瀟洒な勝地であつて、清風の氣に入つた安息所であつた。

芳 昔支那の鄭紫が「詩思は灞陵の橋上にあり」といつた様に清風にとつても、却つてかうした山間の風情に、まことの詩思が湧き來つたと思はれるふしが多い。即ち

遺

芳

新螢千萬點。

明滅信に風流。

たま／＼崑崙の夕に至り。

打鵲の遊をみるに似たり。

新螢千萬點。 明滅信風流。

偶至崑崙夕。 似看打鵲遊。

は獅子溪の螢火をみての純情であり、

(1) 遠圖誰か寺を建てたる。

この最高峰に據る。

事去つて千年の後。

(2) 小僧。 雄僧猶鐘を叩く。

(1) 支那の崑崙山。

(2) かまゝぎを打つあそび。

遠圖誰建寺。

據此最高峰。

事去千年後。

雄僧猶叩鐘。

は大寧寺の古鐘の響に、感情を波打たせたものである。このあたりになると、同じ清風の詩といつても、「夜靜かに鐘聲を聽けば、音響尤も清越と爲す」といつた、心を見出すではないか。今はこの寺のあたり、白芙蓉などかほそく咲き出で、英雄の墓空しく苔蒸した幽景となつて、そこいらにたゆたふ梵鐘の餘韻、一きは感慨を深からしめるものがある。

芳 次に清風の愛木で、詩材に上つたものでは、松が一番である。其の清節を愛し、又剛直を愛した清風である。土佐に遊んでみる、紀貫之、觀月の松などもいゝにはいゝが、これにはそれほ

どの思想がない。そこになるとこれには、まるで人格が打込まれてゐるのがうれしい。

天保八年十月廿三日の作――

愛し見る高田神嶺の松。

枝を摩し幹を撫し緑陰濃かなり。

今より千歳君の地に託す。

春到れば能く萬丈の龍とならん。

愛見高田神嶺松。

摩枝撫幹緑陰濃。

自今千載託君地。

春到能爲萬丈龍。

曾て武洲高田應神の祠に調す。懸松數十株をこの傍に買ふ。船に馬に、二千里の輪を経て、國に達す。その全きを得るもの縁に二なり。

(1) 大きな松のこま。

(2) 名は新左衛門、近藤清石の實父。

(3) ヒノトリの年。

(4) 廿三日。

今に十有五年なり。乃ちその一を以て、子文大玉賢兄に贈る。

天保八丁酉初冬念三。

源 清風

はその中でも最も光つた詩といへよう。この松は清風松の兄弟分で、今も尙萩の門田家の庭中に傳はつてゐる。五葉の松である。

尙、松に次いで詩材に上つてゐるものに、梅、櫻、竹があるが、今は省略に従ふこととし、最後にせひ述べて置きたいのは清風の詩風に就いてある。

清風は詩作に當つて、頗る形式に拘泥しない風があつた。そこでその詩の一一に當つて仔細に吟味するならば、平凡などの合つてゐない作もかなり多いのである。即ち一氣呵成

に、一の氣魄を以て作り上げてしまった、といった風のものである。

時の人で往々、この點をとがめるものがあると、清風の答はいつもきまつてゐた。

「何をチンブンカンを言ふか。」

とこれである。清風の「チンブンカン」は極めて有名なもので、大抵の者は、これで參つてしまつたといふ。こゝにも清風人格の一端があらはれてゐて面白いではないか。

和歌

一轉して、和歌の方では、「海防攘夷の日吻ありと」いはれてゐるところの

西北の風防ぎして幕打てよ  
我が日の本の櫻見る人  
を先づ第一に擧げねばならない。これはかの「來てみれば聞くより低し富士の山」の和歌と共に、青年時代の作であつて、其の意氣の高い點で有名である。その他の名作に左の如きものがある。

題知らず。

忘れむと思ふこゝろの忘られてなほ思はるゝ

海のにしきた。

しきしまのやまとごゝろを人とはゞもくりの

使斬りし時宗。

から人のひるねの夢もさめやせむ天地ひゞく  
いし火矢のこゑ。

狂 吟

兩輪の文武のみちが缺くるなら片輪ものとは  
孔子のたまふ。

同じく文に偏するものへ

片輪なら髪を剃れかしたためしあり土佐坊しよ  
うしゆん筒井淨妙。

雜 吟

家は武家身はものゝふときくからに思ひたま  
へや忠孝の道。

忠孝をなす業としては外になし文武の道ぞわざ  
にこそあれ。

彼の和歌が詩に於けると同様、その思想の中心を、風流に置  
くといふよりも寧ろ國事に置き、就中國防のことによく實相  
観入してゐることは、其の特色といはねばならぬ。狂吟の中  
で特に文武の兩道を並び重じてゐるところは、一の教育思想  
としても、時勢に魁けた人、清風に最も面白い點であるといへ  
よう。

歌に氣が勝つて言葉に生硬な傾きの多いことはこの人の  
人となりの程もみえるところで、一方又當時の志士らしい共  
通點が、いかにもよく表現されてゐる。



俳 句

俳句では有名な「三隅山莊十二勝」がある。

豊原、夜雨

時雨日や門田に鶴の夜もすがら。

武根洞、晴雪

斧の柄も埋れて白し洞の雪。

松島、春曉

松しまや油のやうな春の海。

宇宙海、漁火

漁火や子を思ふ親秋の濤。

兒島、霜葉

紅葉ちる岸は翠の海の上。

澤江、明月

枕にも苗にも上れ浦の月。

圓通寺、曙鐘

霜の夜や千尋の底に鐘の聲。

紫津、彩霞

いざ酔はつゝまれて寝む夕霞。

嵩山、歸雁

歸る雁花の風吹に送られて。

妙見山、曉雲

此峯へ拱て照るや星月夜。

通浦、寒濤

雪の濤老の耳には勝の聲。

東廬山、翠嵐

千丈の松に聲あり青嵐。

機務倥偬の生活に追はれてきた清風にかうした俳句の藝術が存したことは、これまたいろ／＼の意味から、興味のあることではないか。

○

又「教訓十二吟」といふ次の如きものも仲々の興味である。

治不忘亂

治まれる春に柳の亂れかな。

孟母移居

子を思ふ鶴は初日の松の上。

食者命の本

其の汗の米となるのは田草取。

行貴清潔

泥水を拔出て蓬の清さかな。

農事辛苦

露霜となる曉老の苅田かな。

陰徳

人知らず積むや陰徳夜の雪。

國恩

草も木も育つ恵や春の雨。

心有<sup>あはれ</sup>憐<sup>れみ</sup>

岩角を花や包みて咲ふ嶂。

事察<sup>さ</sup>機<sup>か</sup>微<sup>び</sup>

鉢植の松から聴くや秋の風。

陶<sup>たう</sup>祝<sup>しゆ</sup>務<sup>む</sup>事<sup>じ</sup>

分陰を惜むもあるに午睡かな。

貯<sup>ちよ</sup>穀<sup>こく</sup>

蝗刺す禽さへ冬の手當かな。

事有<sup>こと</sup>本末<sup>ほんまつ</sup>

北窓を塞いで後の炬燵かな。

— 嘯<sup>しよ</sup>雨<sup>う</sup> —

これらも亦純藝術の香りを求めんよりは、むしろ教訓の味  
ひを、鑑賞吟味すべきものが多いのである。

一四、清風を繞る人々

偉人の背後には必ず賢母がある。維新の先驅者清風をして清風たらしめた隠れたる力に、亦その母堂と夫人梅子のあつたことを見のがしてはならない。

母堂名は岩、貞順謹嚴で、専ら子弟教養のことに力めたこと、その幼時の傳に記した如くであるが、更に寶曆明和の際は、藩政府が特に勤儉の令を施したので、深く素朴の風を養ふことに力めた人である。讀者はこの母の影響の、如何に多く清風に反映したものであつたかを、よく思ひみねばならない。

又夫人梅子も、その寛政十年を以て生れ、明治八年享齡七十八才を以て終るまで、終始一貫、自ら奉すること甚だ薄く、人に

恤むこと頗る厚かつた。殊に衣服に一度も絹布を着たことなかつた事と、怒の色を一度も外に表したことのなかつたこと、は、共に美しい婦徳として、世嗣、忠之教養の上に、大なる教訓を與へたものであつた。



かくて積善の家に餘慶の譬へ、清風と夫人梅子との間には

三男三女の子寶が恵まれたが、いづれも國家有用の材として家門は益々榮えて行つた。

(備考)

○ 唯雪は父の遺志を繼ぎ、嘉永年中より明治の初まで同志と謀り、大いに國事に盡瘁した。

○ 贈正四位山田亦介(愛山)は、山田市郎右衛門の男にして、清風の姪である。

○ 伯爵山田顯義は亦介の實弟山田七兵衛の男である。

○ 贈正四位竹内正兵衛は、八谷秀子の男にして、清風の姪である。

○ 贈正四位河上彌一郎は、右秀子の男、河上忠右衛門の長子

○ 陸軍大將大庭二郎は、右秀子の女、河野氏の外孫である。

○ 贈正四位御堀耕助、前名太田市之進は、清風の婚族である。清風の祖父爲之の妻は、太田氏、故に耕助は少年時代、その父太田要藏に従ひ、屢々清風の許に来ては、教訓を受けたものである。要藏は乃木十郎の實弟であり。耕助は乃木希典の従兄であつた。

右は清風を繞る人々の略系譜であるが、中にも世嗣忠之と

次女駒子を夫人とした竹内勝愛、及び周布政之助に就ては、以下聊か筆を改めて述べて置きたいことがある。それは清風精神の存するところを、最も近く繼承して、雄々しくも防長二州を透して、明治維新建設のため、日本全土によびかけ、涙ぐましい犠牲的活動に、鮮血もて國土を色どつた人たちであるからである。

大津唯雪

大津唯雪、はじめの名は、次郎三郎忠之、文政八年七月八日を以て萩町に生れた。丁度頼山陽が、日本外史を樂翁公に差出した前年のことである。

彼は特に性剛健で、文武の道にも秀で、國典に通じ和歌をよ

くし、藩主忠正、忠愛二公に仕へて勤王の大義を唱へたが、流石に清風の一子として、はづかしからぬ素質を多分に持合せてゐた。

はじめ彼が江戸に出仕せんとする嘉永六年、彼は父清風から次の詩を以て其の心を戒められた。

誠意正心唯至忠。

立身夢寐も中に忘れず。

人を撫す仁恕吾が子の如くんば。

福壽天より汝の躬に賜はらん。

誠意正心唯至忠。立身夢寐不忘れ中。

撫人仁恕如吾子。福壽從天賜汝躬。

と。

この親にしてこの子あり。この事まことに唯雪一生の好印象として、胸裡深く藏せられてゐた。彼は事あるごとにいつもこれを思ひかへしては、常に吾と我が心を勵ますのであつた。

唯雪は嘉永六年、米艦渡來の時、長州藩の先手物頭役として藩兵を率ゐ、武州大麥の戍衛に當つたのを手はじめに、越えて安政元年に、皇室に、炎上のあつた時は、藩使として天機奉伺の任に當り、同じく三年には長崎開役として赴任し、又安政・文久の間には、よく京都並に江戸に留守居役として往來し、随分と東奔西走したものであつた。

それから文久も三年になると、加茂八幡の行幸の鹵簿に扈從し、同年堺町門事變及び七卿落の際には京都に留つて、同志と共に時務に幹旋した。次いで元治甲子の年、蛤門の義舉並に馬關の攘夷については、盡瘁したこと並々ならぬものがあつたが、この歳藩論騷擾に當り、遂に勤王同志輩と共に獄に下つた。この年は志士憂鬱の年であつたが、翌春正義貫徹せるを以て釋された。まことに父の教の如く「誠意正心唯至忠」によつて、福壽天より汝の躬に賜はつたといふべきであらう。

舞臺は廻る。慶應元年二年の際、幕府が再び征長の軍を發するや、廣島應接の事が忙しいので、唯雪は同志と共に、其處に赴き、談判諸事に關して、奔走した。

「すべては乃父の遺志だ。」  
 と自勵自奮いつも眉宇に虹のやうな氣がみえてゐたといふ。  
 廢藩の後は、官を辭して、三隅山莊に歸臥し、専ら風月を楽しん  
 だが、彼が國學に通じ、敷島の道に秀で、ゐたことは、彼の晩年  
 をして心頗る餘裕あらしめたものである。その後毛利氏の  
 編輯所に入つてからは、よく平和な心境裡に、腔僊を極めた往  
 事の思出と、維新成つて聖代の恩澤に浴し得るの喜びとを語  
 るのを、楽しみとしてゐた。

かくて明治廿年春四月三日、花の根にかへるが如く、靜かに  
 東京に長逝したが、遺骸は、長門國三隅村なる清風墓側に葬ら  
 れて、今に及んでゐる。後朝廷より前功を賞せられ、特旨を以

て、從四位を贈られた。

竹内勝愛

竹内勝愛は、清風の女婿で、幼名は清記、後に正兵衛といつた。  
 彼の生れたのは文政の六年で、丁度青山延子の皇朝史略の出  
 來上つた記念すべき年である。

出たのは八谷庄左衛門の第六子としてゝあるが、後萩に  
 出て、馬廻役、竹内庄太郎の養子となつて、其の家を嗣ぎ、遂に竹  
 内を名乗つたのである。

彼は資性謹厚で、明達な人物といふ方であつた。夙に文武  
 の業を修め、少壯の時から江戸に出て、長藩邸に仕へてゐたが、  
 最も彼の名を得たのは、その吏材にあつた。専ら金穀出納の



事務に鞅掌して、果斷よく事を處してゐた腕の冴えは、清風そ  
つくりのところがあつた。

嘉永六年、米艦が浦賀に来て、天下喧囂をきはめ、海防の議の  
盛に起つたときなども、

「長藩の警備は相州だ！」

と聽くや、

「よし來た！」

とばかり決斷一過、義に勇んで早くも、佐久間修理と謀つて  
沙村の毛利邸に、大砲鑄造をおつはじめたのは彼であつた。

かくてこれを相州の陣屋に運んで堡壘に備へ、同じ在番中  
に中島三郎助について、砲術を學んだのも彼であつた。彼は

其の後も江戸に於て、下曾根金三郎について、更にこの道の蘊  
奥を極めた。

そして其の間に、檢使より、所務代官を経て、とん／＼拍子に  
累進して行つた。かの元治元年、甲子の秋、京都に變の起つた  
際など、福原越後に従つて東上してゐた。そして大いに同志  
の間に献策したものである。

中にも七月十九日に於ける、伏見街道の奮戦は、彼にとつて  
最も記念すべき事件であつた。恰も其の事をあげんとする  
前夜、置酒高會して、議論紛々の渦卷のたゞ中の出來事である。

「正兵衛がゐないぞ。」

と誰かゞ言ひ出した。なるほど一同が氣付いてみれば、正

兵衛の姿がみえない。

「どうした。どうした。」

と總立ちになつて探してみると、これはしたり、離れの一室に前後も不覺で、鼾聲も高々と寢入つてゐるではないか。

「この大事な場合にどうしたんだ」

と詰めよると、

「戦争となつたら寢られぬではないか。一寸今の中にと一睡して、氣力を養つたまでだ。」

と平氣な答へ。答へ終ると又、鼾聲元の如く寢入つてしまつた、といふのである。寛宏沈重の性格、まことに維新の志士の面影が濃いではないか。

しかし其後事は志と違ひ、時運は凡て正兵衛等に不利な形勢となつてあらはれて來た。即ち俗論黨の跋扈である。形勢今や奈何ともするなくして、彼等はちきに天王山に走つた。そして投獄の憂目にあひ、遂に四十二才を一期として、萩の野山獄中に白刃の露と消へてしまつた。はじめ三隅村大蔵山に葬られたが、後萩松本の東光寺にある勤王志士の墓域に改葬されて、今に及んでゐる。後、生前の功勞を賞せられ、特旨によつて正四位を贈られた。

周布政之助

彼も亦、清風を繞る人々の一人として、記憶せねばならぬ人物である。やはり清風と同じ三隅村に、勝愛と同じ文政の六

年を以て生れ出た。蓋し、そこには何等かの暗示が宿されてあるかの感がある。そして又賢婦人の稱ありし其の母が、特に村田家の出であることも一の因縁である。

されば彼が十八才にして、明倫館に入るまでの感化の大半は、清風に負うてゐるといつてもよからう。實際彼と中村九郎の二人は、幼少の時より、く清風の許に出入して、特別に教訓を受けたものであつた。「三つ兒の魂百まで」で、彼が一脈清風の精神をうけついで、明治維新の開拓に生きたことは素晴らしいものがある。

不幸にして早く父に別れたが、其の後にはよく母に仕へたので

「實に偉い子だ。孝行な子だ。」  
といつて、當時村の評判物となり、後には藩府から特に褒美を賜はつた程であつた。

明倫館に學ぶこと七年、弘化四年、彼が廿四五才のときにはじめて官途について、檢使の役についた。

「彼は才物ぢや」  
として、忠正公のお眼鏡にかなひ、はじめ政務役に拔擢されたのは、それから間もないことであつた。彼が政治方面に興味を感ずること一人深くなつたのも、この頃からのことであると思はれる。

時廻つて、同じく嘉永の六年「米艦來！」の聲々に、驚愕の嵐が

日本全土、津々浦々にまで行渡るや、幕府は周章て、策を列藩に尋ねるに至つた。この時である。

「外請は拒絶が然るべき御事と存じ上げます。」

と鐵よりも堅い確信を、忠正公に献議したのは政之助であつた。

しかし其の後幕府の措置は、段々とそれに反対な方向を示さうとし、時局は刻々に暗雲の低迷を來し、志士政之助、絶好の活躍舞臺が到來しようとした。

彼は遂に時雲に乗じて、三條中納言等によつて、宮中に引見され、その名畏くも天聽に達するの耀かしい光榮の日が來た。彼は衷心から忠正公に代つて、勤王の誠意を披瀝し、宸襟をお

休め申上げることにかめた。

文久壬戌の年、彼は名を改めて麻田公輔といつた。その翌年四月には愈々攘夷の實行期が來たので、彼は誰よりも先に京都から歸り、檄を傳へて、外艦を赤間ヶ關に撃たせてしまつた。俄然國內の視聽は、防長の上に集められて來た。

「外艦砲撃！」

そして幕府對長州の感情は、益々深刻な風雲を孕んで來た。すると長州藩に於ても、藩論が内部から割れて二派となつてしまつた。曰く正義派の解消、俗論黨の跋扈。とその果

は、  
「政之助は國賊だ。」